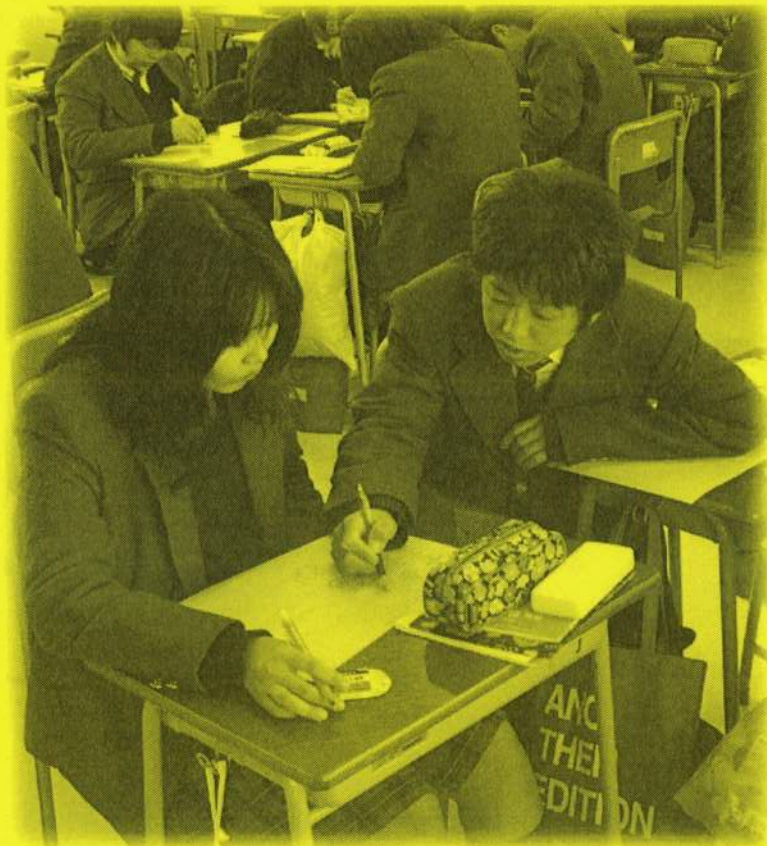


平成22・23年度

# 「学び合い（協同学習）」2年間の取組



岡山県立邑久高等学校



## はじめに

校長 谷川 真利子

本校では年々入学してくる生徒が多様化し、すべての生徒の学力をいかに伸ばしていくかということが大きな課題となりました。平成21年度に校内に学力向上プロジェクトチームを立ち上げ、どのようにすれば真の学力を生徒に身につけさせることができるかを研究しました。一部の教員が授業で「学び合い」を取り入れていたこともあり、平成22年度から、全校あげて多くの授業の中に「学び合い」を導入することにしました。同時に、平成22年度から2年間、県教育庁指導課主管の「高等学校教科指導パワーアップ事業」数学の研究指定校になり、このテーマを特に数学科を中心にいろいろな角度から追求できることにもなりました。

最初は、教員の間から「学習進度が遅くなるのでは」といった不安の声が多く出ましたが、先進実践校訪問や校内での公開授業などの研究を重ねた結果、「学び合い」への教員の理解が徐々に深まっていきました。教員が生徒の理解度を確認しながら授業を進めることができ、また生徒が仲間の表情を直接感じとることができるため、学習に積極的に取り組む雰囲気生まれてきたという報告が多くの教員から寄せられました。また生徒の具体的な評価については、「班での学び合いがどれ位大切か分かった」など概ね高いものでした。

導入2年目の今年度は、全教職員が授業のどこかの場面で「学び合い」を導入することとしました。「教科指導パワーアップ事業」研究指定校の2年目でもあり、さらなる研究と深化を図ることができました。中京大学の杉江教授、岡山大学の曾布川教授、高旗准教授、県教育庁指導課の赤松総括副参事に昨年度から継続して指導助言を頂きました。また県内外の多くの「学び合い」の先進校や実践校を訪問し学ばせていただきました。この紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

岡山大学の高旗准教授のご協力を得て、「学び合い」を導入したことによる効果について生徒にアンケートを実施し総括しました。導入前に目標としたところまでには至りませんでしたが、導入したことでの成果は十分読み取れるものでした。

「学び合い（協同学習）」をすることで、教科内容を理解できるだけでなく、社会で生きていくために求められる「コミュニケーション力」、「プレゼンテーション力」が身につくことも期待できます。本校では次年度も引き続き「学び合い」学習を継続し授業改善に取り組んでいきます。授業が教員からの一方通行にならないよう、生徒の理解度を確認し、生徒自身が自分の考えを表現できる機会となるよう努めてまいります。



## 例 言

- 1 本書は岡山県立邑久高等学校が、平成22・23年度の2年間に取り組んだ「学び合い（協同学習）」の実践報告書である。
- 2 本校における「学び合い（協同学習）」の取組は、平成22年度から2年間、岡山県教育庁指導課の高等学校教科指導パワーアップ事業（数学）の指定を受けていた。
- 3 本書の作成にあたっては、次の方々から特別に稿をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

杉江修治氏（中京大学国際教養学部教授）

曾布川拓也氏（岡山大学大学院教育学研究科教授）

高旗浩志氏（岡山大学教師教育開発センター准教授）

赤松一樹氏（岡山県教育庁指導課総括副参事）

- 4 本書の編集は平成23年度学力向上委員会が行い、執筆は学力向上委員会の委員を中心に、本校教員・生徒が分担した。

### 平成23年度学力向上委員会

教頭 河 合 哲

教諭 下 村 雅 和

教諭 姫 路 真由美

教諭 荒 金 徹

教諭 渡 邊 真 哉

教諭 松 本 太

教諭 小松原 基 弘

教諭 出 射 恵

# 目 次

はじめに	校長 谷 川 真利子	
特別寄稿		
邑久高校の授業の確かな改善	中京大学国際教養学部 教授 杉 江 修 治	1
学び合いと数学教育	岡山大学大学院教育学研究科 教授 曾布川 拓 也	2
教育の力による社会的包摂を一格差と向き合う協同学習		
岡山大学教師教育開発センター 准教授 高 旗 浩 志		3
『邑久高校 「学び合い（協同学習）」 2年間の取組』発刊に寄せ		
岡山県教育庁指導課 総括副参事 赤 松 一 樹		4
「学び合い（協同学習）」導入の経緯		
岡山県立烏城高等学校 教頭 杉 山 義 則		5
2年間の取組		
「学び合い（協同学習）」導入から現在までの研究経過		6
公開授業研究会報告		7
数学「高等学校教科指導パワーアップ事業」報告		11
各教科実践報告		12
「学び合い（協同学習）」導入のための生徒オリエンテーション		23
教員研修会		24
先進校の視察・学会参加		30
中学校での出前授業		32
生徒の声・教員の声		33
アンケート考察		35
「学び合い（協同学習）」導入のための環境整備		39
平成24年度以降の計画		40
資料		41
取組のまとめ	教頭 河 合 哲	42
編集後記		44

## 邑久高校の授業の確かな改善

中京大学 国際教養学部 教授 杉江 修治

高校生たちは、大人への移行を目前に控えている。彼らが、教師主導の受け身の学びしか経験しないとすれば、大人の世界での主体的な活躍を期待することは難しいだろう。実際、大学ではこのところ、初年次教育に力を入れるようになってきている。大学での本格的な教育に入る前に、学びとは何か、平たく言えば、学びは自分のことだという基本を、高校を卒業したばかりの学生たちに教えなくてはいけない実態があるのである。学習意欲に支えられた主体的な学びを仕組むことは、高校教育の重要な課題になっているといえる。

主体的な学びは学びの本質でもある。人はだれでも成長への意欲を持っている。失敗体験を繰り返すことで、人前で意欲を示すことをためらう生徒を生むことは、大きな人材の損失である。意欲にあふれる自分自身への信頼感を持たせて社会や大学に巣立たせたいものだ。

単なる習得を目標とするような学びの場では、個人差が歴然と表れる。出来不出来というシンプルな物差ししか存在しない場では、個人差が人格の大きな部分を占めてしまう。人は確かに個人差がありはするものの、人格にはより大きな、人としての共通性がベースにある。だれもが自分自身の可能性を追求したいと思っている。個人差と、より重要な人間性という共通性を踏まえた人間理解が、高校教育では不可欠である。

私は邑久高校の研修会に、これまで5回参加した。高校での授業改善の動きが近年大きくなってきているとはいえ、学校体制でしっかり取り組みを始めた事例として貴重である。教師集団が協同して改善に取り組む高校として、興味を持って参加させていただいた。

正直、昨年度当初の実践には、これまでの教え込み、知識注入の授業に対して経験だけからの工夫を加えたものが多くあり、生徒の学び合いもぎこちないものであった。しかし、徐々に学校全体としての改善がみられ、1年の研究的な取り組みを経た今年度6月には、授業で追求する学力観の広がりやうかがうことができ、生徒が自ら動くことができるような仕掛けの工夫が多くなされ、授業過程にもこれまでにない挑戦的要素を組み入れた試みが増えた。

半年後の11月には、特に公開授業で、生徒の主体的な学びを促すべく、教師の出番を少なくし、生徒が自律的に学ぶ機会を意図的に入れ込む実践が提案された。そこでは、学びの主体的な構えを作らせるための、導入時の教師の解説も説得的であった。

教師の経験の重要さは述べるまでもないが、そこにさらに原理を学習し応用するという構えが、授業改善には必要である。邑久高校の実践の推移にはそういった形の学校の成長を見ることができるよう思う。

教師が変わるには、生徒が変わる以上の時間と我慢が必要であると言われる。教師の協同がどのような成果を生み出すのか、確実な前進を進めている邑久高校の今後はさらに楽しみである。

## 学び合いと数学教育

岡山大学 大学院教育学研究科 教授 曾 布 川 拓 也

数学という教科はなかなか厄介な代物である。世間一般に「数学が出来るのは頭がいい」、「数学は理系だ」という見方がある一方で「数学が出来ても世の中に出たら役に立たない」と言っているこの教科を嫌う人も多く、特に高等学校では、それまでに辛い思いをしてきた生徒が少なくないため苦勞する教員は多い。しかし一方で、数学を学ぶことによって得られる能力が社会で高く評価されていることも事実である。このことを我々は常に心に念じなければならない。

数学を学ぶ・教えるときには、大きく分けて3つの要素がある。それは a. 概念・状況を理解すること b. 解いて答えを出すこと c. 求めた答えを他人にわかるように表現すること である。ところが中学校以降の数学では、「解いて答えを出す」に主眼が置かれ、理解や表現の部分が疎かになっている感がある。しかもそれが数学が「わからなく」「嫌いに」なる原因になっていることに気付かないケースが多い。これまでの多くの数学の授業は、「一方的に教員が教え込み、公式・解法を暗記してドリル練習させる」といった形が主流であった。自ら取り組みればそれなりに力をつけられるのかもしれないが、そんな生徒は決して多くない。難しい数学そのものは社会に出てから直接は役に立たないとは思いますが、抽象度が高い数学を丁寧に学ぶことを通じて得られる能力を獲得する機会が損なわれてしまっていることには注意しなくてはならない。

この2年間、邑久高校へお邪魔して見せてもらったのは「学び合い」の形式を取り入れた教育方法である。これは先に述べた算数・数学教育における問題点を克服するのに適した一つの方法であると言えよう。その理由は次の2点に集約されると考える。

- 1 仲間に説明すること：教師が生徒にたいして概念を「教える」ことはほとんど出来ない。学習者が個々にその状況を理解するのであって、他者の一方的な説明が有効でないケースが多い。特に数学科の場合、教師が理解しているレベルと生徒のそれが乖離していることが多く、その結果一方的に教え込む、公式を丸暗記させるといった授業になりがちである。その点、学習者自身が自分の考えを他人に説明することを通じて、曖昧な概念や表現を修正したり深めたりすることが出来ることで、言葉面だけでわかった気になることにとどまらず、その内容を本質的なレベルで、個人のそれまでのヒストリーと関連づけるような形で理解することが出来る。これはエピソード記憶として定着しやすいため、学習の効果が高くなる。
- 2 仲間の説明を聞くこと：逆に他の学習者の説明を受けることで、多様な考えに触れることができる。さらに不完全な拙い説明を聞いたときには、逆にそれを理解しようと努める学習者からの働きかけが起きることで、理解がより深くなるケースが多く見られる。このことは、理解のレベルが異なる教師との間にはなかなか起こりにくいですが、学習者同士のコミュニケーションがこれをもたらす。

数学は「無味乾燥な公式を覚える」ことだと思っている生徒が多いようだが、このような硬直化した見方が、学び合いの形態を取り入れることによってより柔軟なものになりうる。その結果、これまで「全てを教え込む」必要があったものに対して、本当の意味で「精選して」内容を絞り込むことが出来るようになる。すなわち全てのパターンを網羅して教えなくても、得たばかりの知識を類似の問題に応用したり、過去に学んだ内容を援用して新しい問題に取り組んだりすることが出来るようになるため、結果として授業時間の節約になるのである。

本事業は岡山県教委の授業力パワーアップ事業の一環でもある。邑久高校における取り組みはもちろんまだ始まったばかりであり、今後これが定着していくかどうかはわからないが、ここに関わった全ての教職員や生徒に大きな意味をもたらしたことは間違いないと思う。



## 教育の力による社会的包摂を—格差と向き合う協同学習

岡山大学 教師教育開発センター 准教授 高旗浩志

公教育は3つの社会的機能を担っています。ひとつは共通の価値規範、道徳、言語、知識・技能等を伝える社会化機能です。この機能によって社会は一定の等質性を保ち、その統合を果たすことができます。いまひとつは、もっぱら学業成績に基づいて個人を特定の進路や職業へと振り分ける選別・配分機能です。高度な知識・技能によって複雑に分業化した社会を将来にわたって存続させるために不可欠な機能です。一見相矛盾するこれらの機能を、法律に支えられた「制度としての学校教育」が担うことは正しい、と主張することが正統化機能です。何を正しいと捉えるかは時代と社会の文脈によって常に変化しているにも関わらず、です。

周知の通り、旧教育基本法に基づいて成立した戦後日本の学校教育制度は、当時の世界中のどこを見渡しても有り得ないほど、優れて理想的な民主的単線型の教育システムでした。生まれや育ちに関わりなく、本人の努力と能力によって教育の機会を均等に保証する仕組みとして成立しました。もともと社会とは不平等なものである、その不平等を学校という装置が解消する、あるいは少なくともその差を縮小してくれることが期待されました。そしてこのことは、高度経済成長を経て前世紀末に至る日本社会の中で、一定程度実現したかに思われました。

しかし皮肉なことに、21世紀の私たちが直面しているのは格差社会という問題です。格差社会とは即ち「不平等が拡大し続けている社会」です。しかも個人の努力や能力の結果ではなく、本人の努力によっては如何ともしがたい「生まれや育ち」が後の社会的処遇に理不尽な差をもたらしている。「子どもの貧困」に関する近年の研究がこのことを明らかにしています。社会的な不平等を縮小し、解消してくれることを期待された日本の学校教育制度は、もはやかつてのように「誰もが納得できる不平等」を保証せず、ひたすら「容認しがたい理不尽な不平等」を再生産しつづけているのかもしれない。しかし、その担い手は他ならぬ私たち一人ひとりなのです。

私たちが協同学習による授業改善を求める理由は、このような社会状況と密接に関連しています。互いの異質性と多様性への深い理解と尊重こそ、あらゆる人間関係の基盤に置かなければなりません。異質で多様であることは豊かな課題解決をもたらす核となるからです。授業とは即ち皆で課題解決に取り組む営みです。それは集団を構成する生徒一人ひとりの自主性・自発性を必要とします。自主性・自発性は天から降ってくるものではありません。あの子が頑張っているから、自分に果たすべき役割があるから、判らないことが安心して尋ねられるから、自分とは違う考えに出会えるから等、互いに切磋琢磨し支え合う雰囲気（支持的風土）こそ、即ち協同的な人間関係こそ、子どもたちの自主性・自発性をひきだしてくれる条件です。誰も容易に想像がつくことですが、自由で良好な人間関係に満たされた集団ほど、その生産性は高いのです。

社会的な学力の二極分化とともに、ひとつの学級の中での学力差が深刻になっています。しかし、それは私たちが自らの授業改善を図る絶好の機会です。もとより個々の授業スタイルはあたかも鉛筆の持ち方や筆跡に似て容易に変えられるものではありません。誰も自ら教えられたようにしか教えられず、それを変えろと言われることは、その人格を否定されるのに等しい響きをもっています。しかし「今のスタイルでは通用しない」という苦悩と真摯に向き合った教師ほど、自らを縛っていた学校教育的な枠組を相対化し、より豊かな実践への手立てを見出しています。「できない子の苛立ち」と「できる子の退屈」と「どうでもよい子の無関心」は、他ならぬ教師自身ももたらしているものです。教師があまりにも多くを語り、あまりにも多くを教えようとするのが、子どもたちの自主性・自発性を削いでいたことに気付くはずで

「協同学習」とは単なる方法論ではありません。異質で多様な子どもたちが、その個性において互いを尊重し認め合い、包摂しようとする態度であり理念です。それ故に「協同学習」は教師が自らの実践の創造性を広げ、新たな方法論を生み出す「よすが」になり得るのです。より深刻さを増す格差社会と対峙し、教育の力による社会的包摂を実現するために、「教育における協同の理念」を邑久高等学校から発信しつづけて頂きたいと思います。

## 『邑久高校「学び合い（協同学習）」2年間の取組』発刊に寄せて

岡山県教育庁指導課 総括副参事 赤松 一樹

「全ての教科で学び合いを実践し、自ら考え、共に高め合う授業づくりに取り組んでいくとともに、教科指導パワーアップ事業に数学科が取り組みたい。」

高等学校教科指導パワーアップ事業の募集等を行った指導課主管事業説明会を終えたばかりの平成22年1月、邑久高校から授業改善に対する熱い思いと強い意気込みを感じさせる電話があったことを今でも鮮明に覚えています。

平成22年度に入った5月末、最初の授業研究会で数学科の4人の先生の授業を参観しました。いずれの先生も、丁寧に指導されながら積極的に生徒とコミュニケーションを図ろうとする様子うかがわれました。翌週の公開授業研究会では全教科の公開授業と数学の研究授業が行われ、授業の進め方が大きく変わろうとしていることを目の当たりにしました。その上で、さらに授業の充実を図るためには取り組むべき課題も見えたように思います。例えば、どの授業も本時のねらいが提示されているのですが、ねらいの多くが授業者の視点により表現されており、生徒がこの授業で何をすればよいのか、何ができるようになればよいのかを理解しにくいものになっていました。

2年目を迎えた平成23年度は、具体的達成目標の提示、グループを構成する生徒の役割分担、振り返りによる目標達成度の評価、気付きの確認等を意識して授業に取り組まれ、公開授業研究会を重ねるごとに授業が改善されていく様子を実感しました。例えば、研究が始まった当初は、生徒がグループ活動をする場面では、一部の生徒だけが中心となって学習活動が進み、グループ全員の活動となっていないケースが散見されましたが、2年目の11月に行われた授業では、生徒がそれぞれの役割を果たしながら全員が主体的に、また、積極的にグループ活動に取り組んでおり、生徒の学習に対する姿勢が大きく変化したと感じました。これは、「自ら考え、共に高め合う授業づくり」に向け、授業で心掛けることを全教員が共通理解して取り組まれた成果だと思えます。その一方で、さらに授業の質を高めるために改善できる余地はまだあると感じています。それは一言で言うと、授業者が教材について十分に研究して授業に臨むことです。時として、生徒が理解しやすいよう、噛み砕いて指導することが必要になりますが、教科指導の専門家として、十分に教材を解釈した上で、学問的な本質が損なわれないよう指導することが求められます。さらに、授業の目標が明確で具体的なものになっているでしょうか。指導内容が焦点化され、緻密な指導ができていますでしょうか。生徒は、授業後に自分自身の成長を自覚すること、つまり、「できた、わかった」を実感することで学習意欲が高まります。そのためには、授業者が授業を終えたときの生徒の具体的な姿をイメージして授業の目標を設定することが大切です。

かつては、早く正確に処理すること、早く正解を出すことが求められていましたが、成熟社会を迎えた現代は、多様化、複雑化が進み、変化のスピードが速く、必ずしも正解があるわけではありません。求められるのは正解ではなく、自他の誰もが納得する「納得解」です。邑久高校の取組が、課題意識を持ち、その解決に向けて主体的に考え、よりよい納得解を求めることができる生徒の育成に繋がることを期待しています。

## 「学び合い(協同学習)」導入の経緯

～『出会い』と『つながり』から始まって～

岡山県立鳥城高等学校 教頭 杉山 義則

平成20年12月13日、広島県立安西高等学校で初めて協同学習に出会った。知り合いの教員との「つながり」で、気軽な気持ちで公開授業に参加したことが出発点になるとは、予想もしなかった。邑久高校からは、姫路先生(国語)・松本先生(英語)・私(数学)の3人が安西高校を訪れた。初めて見る「学びの共同体」の授業。各クラスでは4人組のグループで学習が進んでいた。100人を超える教育関係者が取り囲んだ体育館での公開授業は、人垣で生徒の姿が見えず、ステージに上がって参観した。寒い体育館だったが、不思議な熱気が感じられた。そして、佐藤学教授の講演。強烈なオーラを発している佐藤教授の話に引き込まれた。この授業方法で、何かが変わるのではないかと直感した。

河村校長から学力向上の取組について、何か良い方法がないものかと以前から問われていた。その答えが、ここにあるかもしれないと感じ、とりあえずは始めてみようと思った。

平成21年度になり、岡野校長が赴任されたと同時に「学力向上プロジェクトチーム」を立ち上げた。教務課、進路指導課、学年主任が集まって、学力向上のために何ができるか考え始めた。その検討課題の一つとして「協同学習」に取り組むことにした。担当する1年次生の授業で実践してみると、生徒たちは思いのほかスムーズにグループになって話し始めた。意外に簡単なものだと拍子抜けするほどだった。本で読んだことを実践してみると、手応えがあった。他の教員に授業も見てもらった。邑久高校の生徒たちは拒絶することなく、たくさんの教員の見守り中でも普段通りの姿を見せてくれた。

一斉授業では、生徒は静かに話を聞き、ノートを取り、教員に言われたことをするだけである。教室では個人が点としてのみ存在する。協同学習では、生徒同士が互恵的な関係を作りながら学習を進めていく。わからないことを「教えて」と誰かに聞くことで学んでいく。授業実践を何人かの教員と積み重ねると共に、様々な学校を訪問した。多くの実践者に出会えたし、生徒たちが生き生きと活動する姿を見ることができた。

平成22年度には、岡山県教育庁指導課の高等学校教科指導パワーアップ事業(数学)にも指定され、全校で「学び合い(協同学習)」に取り組むことになった。その実践はベネッセコーポレーションの「VIEW21」2010年12月号にも取り上げられたので詳しくはそちらをお読みいただきたい。「VIEW21」に取り上げられたことにより、全国各地から見学に来ていただくことになった。生徒たちも驚いていたが、我々教員も、その反響の大きさにびっくりした。

邑久高校での「学び合い(協同学習)」の導入が、とてもスムーズにできたのは次の方々のおかげであると思っている。その『出会い』と『つながり』に感謝したい。

<理解ある校長先生・教頭先生>

授業での新しい取組を応援し、どんどん学校訪問へ行きなさいと勧めてくださった。

<元気のいい教員集団>

新しい実践を気軽に自分の授業に取り入れようとする柔軟性と、豊かな同僚性があった。

<心優しき生徒たち>

教員の言うことを素直に聞き入れ、新しい授業形態にも積極的に取り組んでくれた。

## 邑久高校 「学び合い（協同学習）」 導入から現在までの研究経過

### 【平成21年度】

- ◎学力向上プロジェクトチーム結成 5月【メンバー7人】
- ◎関西高校公開授業 6月【3人】
- ◎滋賀県立彦根西高校公開授業 6月【2人】
- ◎1年次団会議 7月
  - ・1年次で「学び合い」を導入提案
- ◎広島県立安西高等学校公開授業 7月【3人】
- ◎静岡県立沼津城北高等学校公開授業 7月【2人】
- ◎校内公開授業・研究協議 11月  
「数学Ⅰ」と「現代文」の公開授業
- ◎岡山市立岡輝中学校公開授業 11月【2人】
- ◎職員会議 校長からの提案 12月
  - ・来年度から授業に「学び合い」を取り入れる。
- ◎校内 公開授業・研究協議 1月
  - ・1年 古典、数学Ⅱ、数学A、OCⅠ、保健
- ◎岡山市立足守中学校公開授業 2月【3人】
- ◎岡山市立岡輝中学校公開授業 2月【10人】

### 【平成22年度】

- ◎学力向上委員会発足 4月【メンバー8人】
- ◎「学び合い」職員研修会 4月
  - ・講師 中京大学国際教養学部 杉江修治 教授
  - ・講話内容 「学び合い高め合う授業の創造」
- ◎平成22年度・23年度 「岡山県高等学校教科指導パッケージ事業（数学）」指定
  - ・研究テーマ 「学び合い」  
～自ら考え、共に高め合う授業づくり～
- ◎パッケージ事業 授業研究会（校内）5月
  - ・数学研究授業 数学A、数学B、実践数学β
  - <アドバイザー>
    - ・岡山大学大学院教育学研究科 曾布川拓也 教授
    - ・岡山県教育庁指導課 赤松一樹 総括副参事
- ◎教員相互の授業公開・参観 6月
- ◎校内 公開授業・研究協議 6月
  - ・全クラス 公開授業、研究協議
- ◎岡山市立足守中学校公開授業 6月【1人】
- ◎第1回公開授業研究会 6月【校外参加53人】
  - ・全クラス公開授業（5限目）
  - ・公開研究授業 2年数学Ⅱ（体育館）
  - <アドバイザー>
    - ・中京大学国際教養学部 杉江修治 教授
- ◎岡山市立西大寺中学校公開授業 6月【1人】
- ◎広島県立安西高等学校公開授業 6月【1人】
- ◎協同学習ワークショップ（ベーシック）8月
  - ・南山大学にて 【3人】
- ◎日本協同教育学会 第7回大会 9月【2人】
  - ・山口県立大学にて
- ◎校内 公開授業・研究協議 10月
  - ・1、2年 公開授業（6限）、研究協議
- ◎第2回公開授業研究会 10月【校外参加44人】
  - ・1、2年全クラス公開授業（5限目）
  - ・公開研究授業 2年数学Ⅱ（体育館）
  - <アドバイザー>
    - ・中京大学国際教養学部 杉江修治 教授
    - ・岡山大学大学院教育学研究科 曾布川拓也 教授
- ◎校内ミニ研修会 11月
  - ・授業ビデオを見た後、フリートーク
- ◎関西高等学校公開授業 11月【2人】

- ◎岡山市立足守中学校公開授業 11月【1人】
- ◎岡山市立西大寺中学校公開授業 11月【2人】
- ◎岡山市立岡輝中学校公開授業 11月【1人】
- ◎第3回公開授業研究会 1月【校外参加6人】
  - ・1、2年公開授業（1～6限目）
  - ・学習集団形成度調査解説
  - ・講師 岡山大学教師教育開発センター 高旗浩志 准教授
- ◎神戸大学附属中等教育学校住吉公開授業 2月【1人】
- ◎岡山市立足守中学校公開授業 2月【1人】
- ◎岡山市立西大寺中学校公開授業 2月【2人】
- ◎岡山市立岡輝中学校公開授業 2月【1人】
- 【平成23年度】
- ◎新任者「学び合い」校内オリエンテーション 4月
- ◎神戸大学附属中等教育学校住吉訪問 5月【3人】
- ◎校内授業公開週間 5月
- ◎校内 公開授業・研究協議 6月
  - ・全クラス 公開授業（7限目）、研究協議
- ◎第1回公開授業研究会 6月【校外参加51人】
  - ・全クラス公開授業（5限目）
  - ・公開研究授業 1年数学Ⅰ（体育館）
  - <アドバイザー>
    - ・中京大学国際教養学部 杉江修治 教授
    - ・岡山大学大学院教育学研究科 曾布川拓也 教授
- ◎岡山市立足守中学校公開授業 6月【1人】
- ◎広島県立安西高等学校公開授業 7月【1人】
- ◎協同学習ワークショップ校内実施 7月
  - ・講師 創価大学 関田一彦 教授
- ◎岡山県個集研第15回夏季研修会 8月【5人】
  - ・テーマ「響き合う子どもたち」
- ◎学び合い 校内教員研修 9月
  - ・講師 岡山大学教師教育開発センター 高旗浩志 准教授
- ◎日本協同教育学会 第8回大会 10月【2人】
  - ・千葉大学にて ラウンドテーブルで話題提供
- ◎数学校内研修会 10月
  - ・指導 岡山大学大学院教育学研究科 曾布川拓也 教授
- ◎岡山県高等学校パッケージ推進フォーラム 実践発表 10月
- ◎校内授業公開週間 10月
- ◎学び合い 校内職員研修
  - ・講師 岡山大学教師教育開発センター 高旗浩志 准教授
- ◎校内 公開授業、研究協議 11月
  - ・全クラス 公開授業、研究協議
- ◎数学校内研修会 11月
  - ・指導 岡山大学大学院教育学研究科 曾布川拓也 教授
- ◎関西高等学校公開授業 11月【1人】
- ◎第2回公開授業研究会 11月【校外参加32人】
  - ・公開授業（5限目）
  - ・公開研究授業 1年数学A（体育館）
  - <アドバイザー>
    - ・中京大学 国際教養学部 杉江修治 教授
    - ・岡山大学大学院教育学研究科 曾布川拓也 教授
- ◎岡山市立足守中学校公開授業 11月【1人】
- ◎岡山市立西大寺中学校公開授業 11月【2人】
- ◎岡山市立岡輝中学校公開授業 11月【1人】
- ◎「学び合い」校内研修会 1月
  - ・授業VTR視聴と研究協議
  - ・学習集団形成度調査解説（昨年度との比較等）
  - ・講師 岡山大学教師教育開発センター 高旗浩志 准教授
- ◎岡山市立足守中学校公開授業 2月【1人】

# 公開授業研究会報告

平成22年度 第1回

- 1 研究テーマ 「学び合い」 ～自ら考え、共に高め合う授業づくり～
- 2 期 日 平成22年6月10日（木）
- 3 場 所 岡山県立邑久高等学校 各教室及び体育館
- 4 日 程 12:15～12:45 受付  
12:45～13:30 全クラス公開授業（5限目）  
13:50～14:35 公開研究授業 2年数学Ⅱ（担当：杉山 義則）  
（会場：体育館）  
14:55～16:30 研究協議・講評 （会場：体育館）  
16:30～16:40 挨拶・閉会
- 5 アドバイザー  
中京大学 国際教養学部 杉江 修治 教授

## 公開研究授業 授業デザイン

◎2年1・4組 数学Ⅱ（体育館） 授業者：杉山 義則

- 1 テーマ 直線と円の方程式
- 2 ねらい 直線や円の方程式が書ける
- 3 教材等 数学Ⅱ教科書、プリント（グラフ用紙）
- 4 おおまかな流れ
  - (1) <グラフ準備運動>（参加者全員）
  - (2) 前時までに、直線と円を使って描いたy軸に対称な顔のイラスト紹介（一斉）  
※書画カメラ（教材提示装置）を利用
  - (3) 格子点（x軸とy軸が整数の点）を通る直線や円の方程式の確認（一斉）
  - (4) 格子点を通らない直線の方程式を導く  
※関数グラフソフト「GRAPES」を利用（グループ）
  - (5) 直線の方程式の求め方 発表

### 【生徒の感想より】

たくさんの先生方が机の周りに集まってきたときは怖かった。いつもの授業より理解できたと思う。自分のかいた顔を単純と言われたのがショックだった。眉の方程式を考えると、班で協力して答えを導くことができ初めて「学び合い」って良いなあと思った。目の方程式はすごくおしかった。分数でやるとは…!! 自分の班はやり方は合っていたけど小数でやっていた。あと定義域も忘れていた。でも、説明を聞いてきちんと理解できた。

## 平成22年度 第2回

- 1 研究テーマ 「学び合い」 ～自ら考え、共に高め合う授業づくり～
- 2 期 日 平成22年10月7日（木）
- 3 場 所 岡山県立邑久高等学校 各教室及び体育館
- 4 日 程 12:20～12:45 受 付  
12:45～13:30 1・2年次の全クラス公開授業（5限目）  
13:50～14:35 公開研究授業 2年数学Ⅱ（担当：荒金 徹）  
（会場：体育館）  
14:55～16:40 研究協議・講評 （会場：体育館）  
16:40～16:50 挨拶・閉会
- 5 アドバイザー  
中京大学 国際教養学部 杉江 修治 教授  
岡山大学大学院 教育学研究科 曾布川 拓也 教授

### 公開研究授業 授業デザイン

◎2年1・4組 数学Ⅱ（体育館） 授業者：荒金 徹

- 1 テーマ 指数関数と対数関数
- 2 ねらい 指数関数に関する演習問題を通じて、理解を深める
- 3 教材等 教科書（数学Ⅱ）・完成ノート・練習ドリル（数学Ⅱ）  
演習プリント・数学ファイル（配布したプリント集）
- 4 おおまかな流れ  
(1) 前日実施した小テストを返却し、テストを振り返る（グループ）  
※小テストは「対数の計算・指数についての方程式・不等式」  
(2) 小テストの問題の解説と確認（一斉）  
※書画カメラ（教材提示装置）を利用する。  
(3) 小テストの問題を基に、指数に関する演習問題を解答する（グループ）  
(4) 演習問題の解説と確認（一斉）  
(5) 授業の振り返り

#### 【研究協議 本校教員の感想より】

やはり、今回も課題設定やグループ分けが議論の中心となった。それぞれに対する意見や考え方は様々だった。一つの答えにまとめることが大事なのでなく、教員の支持や生徒の気づきに対する働きかけを大切にしていくこと、また、生徒同士の学び合いだけでなく教員同士の学び合いも時として必要だと強く感じた。これを機に、教員も積極的に授業を見ていくことで、見られているという意識によりモチベーションが更に上がるのではないかと思った。

## 平成23年度 第1回

- 1 研究テーマ 「学び合い」 ～自ら考え、共に高め合う授業づくり～
- 2 期 日 平成23年6月9日（木）
- 3 場 所 岡山県立邑久高等学校 各教室及び体育館
- 4 日 程 12:20～12:45 受付  
12:45～13:30 全クラス公開授業（5限目）  
13:50～14:35 公開研究授業 1年数学I（担当：荒金 徹）  
（会場：体育館）  
14:55～16:40 研究協議・講評 （会場：体育館）  
16:40～16:50 挨拶・閉会
- 5 アドバイザー  
中京大学 国際教養学部 杉江 修治 教授  
岡山大学大学院 教育学研究科 曾布川 拓也 教授

### 公開研究授業 授業デザイン

◎1年1・2組 数学I（体育館） 授業者：荒金 徹

- 1 テーマ 1次不等式
- 2 ねらい 1次不等式を解くことができる
- 3 教材等 教科書（数学I）・教科書完成ノート
- 4 おおまかな流れ
  - (1) 計算ドリル（個人）
  - (2) 不等式の解法の説明（一斉）  
※プロジェクタを利用する
  - (3) 練習問題を考える（個人）
  - (4) 演習問題の解答と確認と学び合い（グループ）
  - (5) 発展問題にチャレンジ、ミニホワイトボードで解答を共有（グループ）
  - (6) 授業の振り返り



#### 【研究協議 校外参加者の感想より】

- ・グループ学習についての方法論や意義が学べ、今年度から始めているグループ学習の中にも多く取り入れていけるエッセンスが学べた。
- ・3名の先生の講評をいただいて、明日からでも実践出来そうなアイデアが浮かんだ。自分の授業も振り返って大変勉強になった。
- ・4人班になり、考えを共有し合い、また別の班に考えを共有しに行くことを体験し、授業で学び合いをしている生徒の気持ちが少しわかった。班による考えの共有の大切さを改めて感じた。

## 平成23年度 第2回

- 1 研究テーマ 「学び合い」 ～自ら考え、共に高め合う授業づくり～
- 2 期 日 平成23年11月17日(木)
- 3 場 所 岡山県立邑久高等学校 各教室及び体育館
- 4 日 程
  - 12:20～12:45 受付
  - 12:45～13:30 公開授業(5限目)
  - 13:50～14:35 公開研究授業 1年数学A(担当:下村 雅和)  
(会場:体育館)
  - 14:55～16:40 研究協議・講評 (会場:体育館)
  - 16:40～16:50 挨拶・閉会

### 5 アドバイザー

中京大学 国際教養学部 杉江 修治 教授  
岡山大学大学院 教育学研究科 曾布川 拓也 教授



### 公開研究授業 授業デザイン

◎1年1組 数学A(体育館) 授業者:下村 雅和

- 1 テーマ 場合の数と確率「くじは何番目に引くのが一番有利か」(課題学習)
- 2 ねらい くじは何番目に引くのが一番有利かを、計算結果に基づいて推測することができるようになる
- 3 教材等 教科書(数学A)・プリント
- 4 おおまかな流れ
  - (1) 本時の学習のねらいと流れを説明(個人) <5分>
  - (2) 事前課題の各自の考えをグループで共有(グループ) <3分>
  - (3) 3本中2本当りの場合の考え方を説明(個人) <3分>
  - (4) 3本中2本当りの場合の確率を求める(個人) <5分>
  - (5) 答えの確認と全員ができるように学び合い(グループ) <3分>
  - (6) 他の本数・当り本数の場合を考える(グループ) <12分>
  - (7) ミニホワイトボードで各班の〇〇本中△△本当りの場合の結果を前に貼り情報を共有し、当初の課題の結果を推測する(グループ) <8分>
  - (8) 教師の補足説明(個人) <2分>
  - (9) 授業の振り返り(振り返りシート利用) <3分>

### 【公開授業研究会 本校教員の感想より】

- ・杉江先生の話は、授業のテクニックだけでなく教育の原点、本質、エッセンスを教えてもらった気がします。
- ・本校の取り組みについて、自信をもって語れる教員が増えたと思う。



平成23年度「高等学校教科指導パワーアップ事業」実績報告書

学校名	県立 邑久 高等学校	学校長 氏名	谷川 真利子
	TEL (0869) 22-0017 FAX (0869) 24-0329 E-mail : oku@pref.okayama.jp	作成者 職名・氏名	教諭・下村雅和
設定 テーマ	「学び合い」(Cooperative Learning) ～自ら考え、共に高め合う授業づくり～		
研究主任 研究副主任	教諭 下村 雅和 (数学) 教諭 荒金 徹 (数学)		
研究報告	<p>◎研究内容</p> <p>①「学び合い」研修会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校内公開授業・研究協議会 (6月2日・11月10日)</li> <li>・職員研修会 4月5日 新任者研修 9月20日・11月8日・1月23日 授業公開 及び 岡山大学 高旗浩志 准教授 による指導・助言 7月21日 創価大学 関田一彦 教授 による「協同教育ワークショップ」 10月17日・11月10日 岡山大学 曾布川拓也 教授 による数学の授業参観と指導・助言</li> </ul> <p>②公開授業研究会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>第1回 (6月9日 校外からの参加51人)、第2回 (11月17日 校外からの参加32人)</li> <li>第1回、第2回とも全クラス公開授業 (5限) の後、体育館で公開研究授業と研究協議・講評 中京大学 杉江修治 教授 による講演・講評</li> <li>第2回の公開研究授業では新学習指導要領の数学Aにおける「課題学習」を念頭に置いた授業とした</li> </ul> <p>③先進校訪問</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・神戸大学附属中等学校住吉校舎 (5月16日 3人) ・広島県立安西高等学校 (7月2日 1人)</li> <li>・関西高等学校 (11月12日 1人) ・倉敷市立玉島高等学校 (7月14日 3人・1月30日 4人)</li> <li>・岡山市立西大寺中学校 (11月21日 2人) ・岡山市立足守中学校 (11月18日 1人・2月15日 1人)</li> <li>・岡山市立岡輝中学校 (11月22日 1人) ・岡山県立林野高等学校 (11月18日 1人・12月14日 2人)</li> </ul> <p>④アンケートほか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒、教員にアンケートを実施し、意識の変化などを数値化 (4種類)</li> <li>・学習集団形成度調査 (岡山大学 高旗浩志 准教授 作成) を利用し集団の意識変化を数値化</li> </ul> <p>⑤その他の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本協同教育学会第8回大会 (千葉大学) への参加 (10月1日～2日 2人)</li> <li>・校内授業公開・参観週間 (5月23日～27日) (10月24日～11月2日)</li> <li>・岡山県個を生かし集団を育てる学習研究協議会第15回夏季研修会へ参加 (8月8日 5人)</li> <li>・授業の様子をビデオに撮り各教員の振り返りに利用 (9月～10月)</li> </ul> <p>◎成果と課題</p> <p>&lt;成果&gt;「学び合い」を本格的に導入して2年が経ち、生徒・教員双方に浸透してきており、生徒の評価も昨年以上に高い。特に、現1、2年次生は入学時から「学び合い」を実践した授業を経験しており、積極的な学習姿勢で臨む生徒が増えてきたことを実感する。それに伴い、家庭学習時間も増えるなど、相乗効果もあった。特に、1年次生は理系選択者が半数に上るなど、「学び合い」で数学に対するハードルが低くなったと考えられる。また、進路の面でここ2年間の進学実績が上がっている点も、日々の授業に対する積極的な姿勢の定着が少なからず影響していると思われる。</p> <p>&lt;課題&gt;コミュニケーション能力や学力との相関関係という点で、「学び合い」がどれだけ影響しているのか数値的に顕著な結果が現れておらず、分析が難しい。生徒の実態をより正しく把握するため、アンケートの改良や形成度調査の分析・検証に、専門家を交えて今後も取り組んでいく必要がある。また、教員サイドの理解もまだまだ十分とはいえず、校内での教員研修や研究授業の充実、先進校訪問等の継続をしていかなければならない。</p>		

## 各教科実践報告

### 国 語

◎ 1年全クラス 国語総合（古文） （各HR教室） 授業者：阿部 雅美

- 1 テーマ 助動詞「たり」を理解する。
- 2 ねらい 助動詞「たり」の文法的意味である「完了」と「存続」の違いを理解する。
- 3 教材等 教科書 『伊勢物語』「東下り」、文法書
- 4 おおまかな流れ
  - ① 前時の復習
  - ② 今時の助動詞「たり」の識別…… 個人→班→全体へ
  - ③ ボードによる発表……班→全体へ
  - ④ まとめ

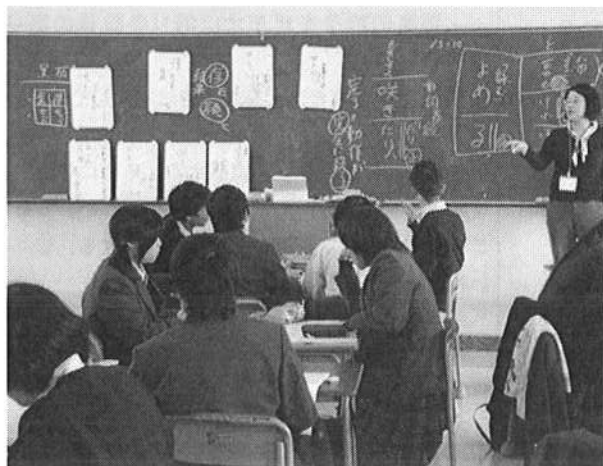
生徒は夏期補習において助動詞を学習しているが、まだ身につけていない。文法書の助動詞の表を見ながら該当の助動詞が何であるのか、やっと見つけられるようになった段階である。

### 方法

- 課題1 各自で文法書「助動詞表」から「たり」を見つける。  
作業① 「断定のたり」と「完了・存続のたり」の二つがあることに気がつくか。  
作業② 本文に用いられている助動詞が「完了・存続」の「たり」と確定できるか。
- 課題2 班ごとに意見を統一する。  
作業① 「完了・存続」の「たり」であるという理由を説明できる。
- 課題3 班ごとに確定する。  
作業① 「たり」が「完了」と「存続」のいずれであるか。  
作業② 確定した理由が説明できる。
- 課題4 班で統一した意見をホワイトボードに書き、黒板に貼る。  
指名された班はなぜそうなるのか説明する。
- 課題5 自分の班の意見と違う場合は、再度検証し、反論する。

### 感想

生徒は助動詞の表の見方や文法的意味の理解を、班内で説明することで身につけられている。またホワイトボードを利用して発表し、知識を共有すると同時に、違う意見について再度検証したり、反論したりすることで、コミュニケーション力や理解度の向上につながっていると考えられる。



## 数 学

◎ 2年4組 数学Ⅱ (2-4 HR) 6/9日 (木) 第1回公開授業研究会 授業者：守安 信之

- 1 テーマ 対数関数のグラフ
- 2 ねらい 対数関数のグラフの特徴を知る
- 3 教材等 数学Ⅱ (数研出版)、教科書完成ノート
- 4 おおまかな流れ
  - ① 関数  $y = \log_a x, y = \log_a x$  について、表の値から座標平面上に点を取り、グラフの概形をつかむ。(プリント使用、グループ)
  - ② 対数関数 (底  $> 1$ ) のグラフの特徴を知る。(グループ、一斉)
  - ③ 関数  $y = \log_{\frac{1}{a}} x, y = \log_{\frac{1}{a}} x$  について、表の値から座標平面上に点を取り、グラフの概形をつかむ。(プリント使用、グループ)
  - ④ 対数関数 ( $0 < \text{底} < 1$ ) のグラフの特徴を知る。(グループ、一斉)
  - ⑤ まとめ

### 感想

具体的に座標平面上に点を取ることでグラフを書かせたが、グループの中でグラフの特徴をよく話し合っていた。見てわかるグラフや図形の特徴について議論をさせると面白いと思う。最後のまとめはきちんと一斉授業で教員が指導すべきだった。

◎ 2年1・4組 数学Ⅱ (2-1 HR) 11/17日 (木) 第2回公開授業研究会

授業者：西岡 正人

- 1 テーマ 対数関数を含む方程式、不等式
- 2 ねらい 対数関数を含む方程式、不等式を解くことができる。
- 3 教材等 数学Ⅱ (数研出版)、教科書完成ノート
- 4 おおまかな流れ
  - ① 対数の復習テストを行う。(一斉)
  - ② 答え合わせをする。(グループ)
  - ③ 例題の説明をする。
  - ④ 練習問題を解く。(個人思考・グループ)
  - ⑤ 応用例題の説明をする。
  - ⑥ 練習問題を解く。(個人思考・グループ)
  - ⑦ 振り返りテストを行う。(一斉)

### 感想

様々な解法がある対数関数の方程式を解くことを学習した。グループで考えることにより、別解が出てきたのは良かった。教員が別解を教えるのではなく、気づきを通しての理解ができた。よりわかりやすい発問が今後の課題である。

英語

◎ 3年1・4組 リーディング (コンピュータ室)

授業者: 松本 太

- 1 テーマ 未知語類推
- 2 ねらい 難解語句を文脈や単語の成り立ちから意味を類推する。
- 3 教材等 補助プリント
- 4 おおまかな流れ
  - ① 例題をもとに、類推のポイントを説明する。
  - ② 8グループに分け、各グループに別々の問題を3分間解かせる。
  - ③ 3分後、答えを1つにしぼり、問題を交換する。
  - ④ ②、③を繰り返す。
  - ⑤ 答えあわせをする。

昨今のセンター試験にも出題されている「未知語類推」を3年生のリーディングで行った。

まず未知語類推のポイントを簡単に解説し、その後3～4人のグループに分け、各グループにそれぞれ異なる過去のセンター試験の問題を配布した。(この時は8グループであったので8種類の問題を配付した)

制限時間は1枚につき3分で、辞書は利用せず、制限時間内にグループとしての最終の答えを決定する。その後問題用紙を時計回りに隣のグループに渡し、新たに渡された問題を同じ要領で取り組む。

すべてのグループが8問すべて解き終わったら解答を発表し、あわせて簡単な説明も行う。

実践の手応えとしては、受講した生徒のほとんどがセンター試験を受験する予定の生徒であったためか、どの生徒も積極的に取り組んでいた。助言をしようとすると拒まれることがあるなど、熱心さが伺われた。

なにより良かったのが、このセンター試験過去問題の難易度である。これ以上やさしいと力の高い生徒がすぐに飽きてしまうし、反対にこれ以上難しいと誰にも手が出ない問題になってしまう。協同学習では課題の難易度の設定がひとつのポイントとなるだけに、この点では大変助かった。

課題としては、8つの英文を丁寧に説明する時間がどうしてもとれないことが気になるころである。ただ、生徒が触れる英文の量としては大変豊富で、やはり一斉授業にはない効果があると感じている。

言い換えを表す表現

難しい単語つかっ  
ちやっとなあ... → 言い換えとこう

Linguists, or specialists in the study of language, say that there are several thousand languages in the world.

言語学者 ことばの勉強での専門家

同意語や反意語の関係

some are A, others are B  
AなものあればBなものもいる。 → AとBは対義語の可能性大。

Some boys are gentle and others are coarse.

おとなしい、やさしい

さあ、問題をしましょう

- 各グループに1枚ずつ問題を配ります。
- 制限時間は1枚につき3分です。
- 辞書を使ってはいけません。
- 3分でグループとしての答えを決めなさい。
- 決めた答えを専用用紙に書きなさい。
- 問題を時計回りに手渡しなさい。
- 問題文にメモをしてはいけません。
- 問題文は全部が問題です

Mrs. Ferret is over there, as usual in vintage jeans. She has more pairs of vintage jeans than anyone I know. Every time I see her, she's wearing a different pair. She really seems to have a penchant for vintage jeans. She loves them very much.

In this passage, have a penchant for means

- ① 注意深い ② 疑わしい  
③ 好む ④ 誇りに思う

## 英 語

◎ 3年2・3組 英語理解

授業者：信宮 優子

- 1 テーマ グループスピーチ informative speech ～ my favorite shop/place
- 2 ねらい 全体の前で、英語で何かを紹介できるようになる。  
Visual aid を使って、情報を与えるスピーチの形式を学ぶ。
- 3 教材等
- 4 おおまかな流れ
  - ① 評価の基準・規準確認(全体)
  - ② グループで準備(グループ)
  - ③ グループスピーチ実施(全体)
  - ④ 相互評価 ふりかえり (個人・グループ)

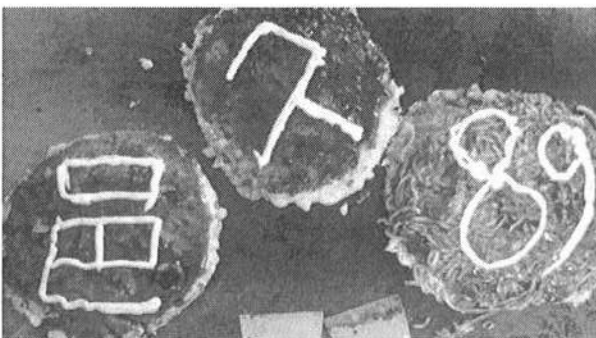
### 指導のポイント

- ・グループ分けに配慮している。教員の指定の場合もあり、生徒間で相談する場合もある。年間3回の発表において、毎回メンバーが変わるようにしている。(英語運用能力が同じまたは違うレベル、好きな者同士、など)
- ・グループ発表の後、個人個人に Q・A をタスクとして与えている。  
これは、impromptu な発話能力を個々に評価するねらいと、グループ内での個人の言語運用能力の差をある程度は違いとして評価するねらいがある。
- ・public speaking の経験を持たせたいため、Visual aid の持参を条件としている。  
聴衆に前を向いて「聞いてもらえる」実感を持たせるためである。

### その他

- ・1年次生担当の年は全員を対象に実施、また3年次生担当の年は、全員ではなく、選択講座実施している。入学直後、中学校からの移行の時期に「読む・聞く」活動を定期的に取り入れたことには一定の効果があったと考える。
- ・生徒にとってはグループでのスピーチは印象に残る形態であったようで、グループでの話し合いの際にも ALT と気軽に会話ができ喜ぶ姿も多々見られた。
- ・トピックの選定、内容については教員側からの援助は皆無としていた。日頃の学び合いでは受動的な姿勢を見せる生徒も、自分の経験から意見を出さざるを得ないこととなるため、個々の「思考する」機会となり、同時に以降のグループ活動の活性化につながったと考える。

### 生徒の Visual Aid から





## 地 歴

◎ 1 年全クラス 世界史 A (各 HR 教室)

授業者：出射 恵

- 1 テーマ 第二次世界大戦の勃発
- 2 ねらい 「ナチスドイツの侵略」から「独ソ戦の開始」までの流れを理解する。
- 3 教材等 ・教科書「第二次世界大戦の勃発（第一学習社 改訂版世界史 A）」  
・プリント
- 4 おおまかな流れ
  - ① プリントの空欄を各自が教科書を参考にして埋めていく（周囲の生徒と相談可）
  - ② 指名された生徒は黒板の所定の場所に解答を書く
  - ③ 教師による解答・解説
  - ④ 今時のテーマについてグループで話し合い、グループごとに黒板に考えたことを書く
  - ⑤ 教師によるコメント
  - ⑥ 授業のまとめ

第 1 回考査までは中学校社会科の内容のプリントに取り組む「学び直し」を実践した。この授業はグループをつくり図説や電子辞書を使用しながら協力して調べていく「学び合い」の形態で進行した。それを通して生徒達はグループで作業をし、話し合うことに慣れることができたと考える。その後の授業は初めに各自でプリントに取り組み、その後にグループで話し合うという形態で進行するようにした。本時はその形をとっている。

### 方法

- ①机は通常の形態で、各自で取り組むことになるが、周囲との相談は構わないと言ってある。すでに「学び合い」に馴染んでいるのか、むやみに騒ぐ生徒もおらず進行している。
- ②指名された生徒の多くは、自信がないのか他の生徒に相談を持ちかけたり、自分の解答と照らし合わせたりしたうえで黒板に書いている。
- ③解答欄とノートに書くべき内容を板書しているのので、それを参照に解説を加えていく。一度、自分なりに取り組んだ内容であるためか、生徒は興味を持って聞いているようである。
- ④生徒の様子を見ながら、今時のテーマとしてグループで考えさせたいことを提示して話し合いをさせる。机は合わせる。話し合った結果は、代表が黒板に書き込む（「グループで出席番号が一番早いもの」など発表者を指定するとスムーズに進行する）。
- ⑤生徒の解答にコメントを加える。突飛と思えるものも基本的に歓迎し、肯定的な評価を心がける。ただし不真面目なものについてはコメント出来ないという形で対応すると生徒達は反省する様子を見せる。
- ⑥テーマの内容もからめ、本時の内容を端的にまとめる。ここまでの展開でコメントしたり、考えさせたり、発表させたりしているので、その分ここではシンプルさを心がけている。

### 感想

今回のテーマは「フランスの要塞地帯のマジノ線をドイツ軍はどうやって突破したか？」だった。生徒は第一次大戦の授業で塹壕戦について学んでいたため、「まず徹底的に爆撃する」「穴を掘って潜り抜ける」などの答えが出た。着眼点の面白さと、その実行にともなう困難さをコメントした後、ドイツの戦車と急降下爆撃機を用いて要塞地帯を迂回してしまう電撃戦のスピードに歩兵（一日 45 ㎞移動するのがせいぜい）の発想にとらわれたフランス軍が付いていけなかったことを話した。自分たちで一度考えた後だけに、気づきの機会となる生徒も多く見受けられた。また、話し合いも活発であった。

# 理科

◎ 1年4組 理科総合 A (理科講義室)

授業者：田淵 博道

- 1 テーマ 地球上の重力加速度の場所による違い
- 2 ねらい 地球の自転による遠心力の発生を考えさせる。
- 3 教材等 自己作製したプリント
- 4 おおまかな流れ
  - ① 前回の授業の復習
  - ② 学び合い
  - ③ ボードによる発表
  - ④ まとめ

生徒による実験を以前から毎週くらいのペースで実施していたので、「学び合い（協同学習）」を違和感なく導入することが出来た。

## 方法

- ・まず個人別に少し考えさせてから「学び合い」を始める。
- ・班ごとに1枚のプリントを配布する。(テーマと流れのメモ用紙)
- ・グループ分けは男女別にして、毎回同じメンバーの3～4名で構成している。
- ・役割分担として、司会・記録者などを決めている。
- ・学び合いで話した内容をホワイトボードに書いて、黒板に貼る。



## 感想

- ・生徒の発想の豊かさで、教員として教えられる事が多い。
- ・授業の最後に、班ごとにまとめと振り返りシートを使って、生徒の考えて理解したことを再確認させる事が次の授業につながっていく。
- ・多くの生徒が課題にやる気をもって楽しく取り組み、ホワイトボードを利用して発表し、みんなで知識を共有できると同時にコミュニケーション力や理解度の向上につながる。

以下、プリントの抜粋

学び合い (メモ)	1年 ( ) 組 ( ) 班	氏名 ( )・( ) ( )・( ) 司会 ( ) 記録者 ( )
テーマ 地球上の場所によって重力加速度の大きさが少し異なるのは、なぜかを考えよう。		
1 表の重力加速度の大きさは小数以下第2位を四捨五入するとすべて $9.8 \text{ [m/s}^2\text{]}$ になる。地球上のどこでも重力加速度の大きさはほぼ同じ値になっている。その原因は地球が地上の物体を引っ張る力=万有引力の大きさが、地上はどこでも同じ大きさだからである。では、地球の形や動きなどを考慮して、地球上の異なる場所で重力加速度の大きさが、なぜ少し違うのかを考えよう。		
2 表からまず、緯度の高い順に並べてみよう。①～⑧の数字を ( ) の中に入れよ。 ( ) → ( ) → ( ) → ( ) → ( ) → ( ) → ( ) → ( )		
3 表から次に、重力加速度の大きい順に並べてみよう。 ①～⑧の数字を ( ) の中に入れよ。 ( ) → ( ) → ( ) → ( ) → ( ) → ( ) → ( ) → ( )		
4 2と3の結果を見比べてわかることは何か？		
5 なぜ、重力加速度の大きさと緯度との間にそのような規則があるのかを、地球の図を使って考えてみよう。(ヒント；重力加速度の大きさは重力に比例する)		
6 わかったことをまとめてみよう。 (1) ( ) が高いほど、(2) ( ) が大きくなる。その原因は地球が(3) ( ) をしていて、地上にある物体に万有引力の他に(4) ( ) 力が働くからである。(5) ( ) では(4) ( ) 力が最大になり、極地では(4) ( ) 力が0(ゼロ)になる。だから、(5) ( ) では重力加速度が最(6) ( ) になり、極地では重力加速度が最(7) ( ) になる。		



## 音 楽

◎ソルフェージュ 3年2・3組

授業者：吉田 まり子

- 1 テーマ 書き換え楽譜を作る
- 2 ねらい 与えられた条件に合わせて、楽譜を移調する。
- 3 教材 ねこ ふんじゃった
- 4 おおまかな流れ
  - ① 本日の課題について指示、班分け（全体）
  - ② 原曲は何長調？ 指示どおりに移調するための調号は？（グループ）
  - ③ 割り当てられた範囲の楽譜を移調する。（個人思考）  
正しく演奏できる楽譜ができたかどうか、ピアノなどで試してみる。
  - ④ 隣の班と楽譜を交換。気づいたことを指摘する。（グループ）  
残りのメンバーは「特派員」の説明を理解する。  
楽譜に訂正すべきところがあれば、手を加える。
  - ⑤ ワークシートに記入。本日の学習についてふりかえる。

### 感想

同じ展開の授業を三回実施。「特派員」がうまく機能したのは初回の授業で、他の班から指摘された記譜上の間違いは、全員が理解し、その後の学力定着につながった。

第4回定期考査では期待以上の成果があった。「指示通りに移調するための調号」を判定するのは各班のリーダー的な生徒で、残りの生徒は写譜の作業をしているだけと思っていたが、定期考査の結果から全員が自力で判断できる学力を身につけていた。



## 家 庭

◎3年 児童文化(3-2HR)

授業者:土谷 三枝子

- 1 テーマ 「言語表現 絵本の読み聞かせを上手にしよう」
- 2 ねらい 保育検定や一部の保育系入試に課されているので絵本の読み聞かせを練習し、相互に助言してメンバー全員が上達する。
- 3 教材等 絵本 学び合いの学習プリント
- 4 おおまかな流れ
  - ① ねらいを確認して、各自が用意した絵本を班のメンバーに読み聞かせる。
  - ② 班でアドバイスや感想を言い合って、良くする方法をまとめる。
  - ③ 班の代表を1人決め発表する。
  - ④ アドバイスを参考にしてよりよい読み聞かせになっているか班で確認する。
  - ⑤ クラスでも1~2人を選出し読み聞かせをしてもらって参考にする。

## 体 育

◎1年1・2組 体育(柔道)

(柔道場)

授業者:神宝 統久

- 1 テーマ 投げ技と受け身
- 2 ねらい 投げ技の中でも取り組みやすい「体落とし」の「投げ」と「受け」を習得し、安全に活動できるようになる。
- 3 教材等 教科書、学び合いカード(別紙)
- 4 おおまかな流れ
  - ① ウォーミングアップ
  - ② ポイントと注意事項の確認(グループ)
  - ③ 活動(学び合い)
  - ④ カード記入
  - ⑤ ふりかえり

## 感想

一斉指導でなかなか身につけなかった技のポイントが、学び合いにより短時間で修正・習得できていた。学習のポイントを明確にすれば教師主導の一斉授業よりも学習効果が向上することを認識した。

資料（家庭）

学び合い学習③ 「言語表現技術 絵本の読み聞かせ」実習

学習の目的と目標

- ①対象年齢を調べる。 作者 絵  
（ 歳）
- ②幼児（対象年齢）を前に読んで聞かせるようなつもりで読む。
- ③よい読み聞かせにはどんな要素が必要かをまとめる。（個人思考）
- ④みんなで読み聞かせをして、個人別にアドバイスを書き出してみる。
- ⑤班で話し合っ班の意見をまとめ代表が発表する。

A司会係（ ） B記録係（ ） C発表係（ ） D教材係（ ）  
メンバー氏名 本のタイトル 感想とアドバイス

A（ ）	「 」
B（ ）	
C（ ）	
D（ ）	
（ ）班 の意見研究か ら見えたこと のまとめ	

他の班の意見やアドバイスで学んだこと感想

自己評価 授業の準備ができている 絵本・教科書・ファイル（A B C）  
授業に参加し意見や発表が積極的にできている（A B C）  
プリントに記入し提出している（A B C）  
絵本の良いところが説明できる  
（お気に入りの理由 ）  
（ ）組（ ）番 氏名（ ）



## 「学び合い（協同学習）」導入のための生徒オリエンテーション

（平成 22 年度）

4 月から全学年への「学び合い」の導入に向け、年度当初の各年次の生徒集会で「今年度から 邑久高校は学校全体で『学び合い』を導入して授業を行う」と生徒に示した。

具体的に「学び合い」とは

- ・自らの学びが仲間の役に立つ、そして仲間の学びが自分の役に立つ
- ・自分のためにも、仲間のためにも真剣に学ぶ責任がある
- ・主にグループの中で個々の責任を果たしていく
- ・自分ひとりが分かるようになるのではなく、みんなが分かるようになる

などというもので、今までのように先生が黒板に向かって一斉に授業をし、生徒は黒板に書いてあることをノートに書き写していく授業ではなく、みんながいろいろ思考したり、活動したりしていく中で全員で一緒になって高め合っていくと呼び掛けた。また、「学び合い」を通して授業内容を理解していただくだけではなく、聞く力・表現する力といったコミュニケーション力をつけていくことも目的である旨も示していった。

具体的な授業のあり方としては、各教科の授業の時間で説明をしていき、生徒は授業の中で「学び合い」とはどのようなものかを理解していくようにした。

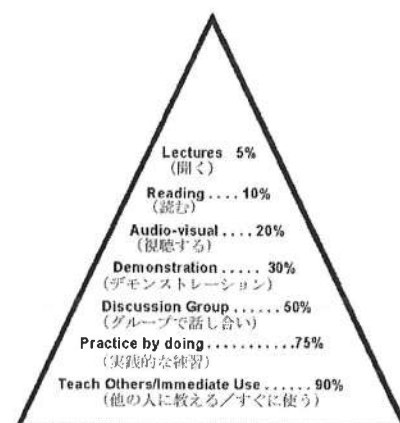
ただ、教員側がまだまだ「学び合い」とはどのようなものか理解が十分でなかったこともあり、教科ごとの説明が十分でなかったという反省があった。

（平成 23 年度）

年度当初 2 年次・3 年次生には昨年度に引き続き 邑久高校は全校で「学び合い」を取り入れた学習を行っていくことを、各年次の生徒集会で示した。1 年次生には入学後のオリエンテーションで「邑久高校は岡山県立高校で初めて協同学習を全校で取り入れている」「すべての教科で『学び合い』を取り入れた授業をしている」ということ、具体的には各教科で説明を受けるようになることを示した。ただ、各教科ごとの説明はかなりばらつきもあり、生徒が多少混乱した面も見られたので、これは来年度への課題として今後改善を要する事項である。

### ＜「学び合い」導入の説明例（数学）＞

- ・一斉授業は教師一人対生徒 40 人ではなく、教師一人対生徒一人の孤独な学習だ。
- ・一人で「この考え方は合っているのかな、間違っているのかな」と思っているのはとても不安だが、複数で考えを出し合ったり共有したりすると安心して学習できる。
- ・一斉授業でただ聞いて板書を写していることは作業であり、自分で考えているわけではない。勉強していると感じているだけで、ほとんど身につけていない。
- ・研究の結果としてのラーニングピラミッドというものがある。それは、「聞く」だけで理解できるのは全体の 5%、「視聴する」は 20%、「グループで話し合う」は 50%だが、「他の人に教える」ことで 90%理解できるというものである。
- ・5%ではなく、せめて 50%を、できれば 90%を目指そう。
- ・先生の説明ではなく、お互いの説明の方が分かりやすいと感じる生徒は多いはずだ。
- ・お互いに協力し、クラス全員が分かるようになる。



## 教員研修会

### 「学び合い高め合う授業の創造」

- 1 目的 「学び合い」の理念について研修し、平成22年度から本格的に授業の中に「学び合い」を導入するための共通理解を図る。
- 2 期 日 平成22年4月5日
- 3 場 所 邑久高校第1会議室
- 4 講 師 中京大学 国際教養学部 杉江 修治 教授
- 5 日 程 

13:30	～	13:35	講師紹介
13:35	～	14:50	講話
14:50	～	15:00	質疑応答
- 6 内 容（講義の要点）
  - ・ 高校とのかかわりは2年ほど。4校とのかかわり。邑久高校が5校目。
  - ・ 協同学習・・・大学では、授業改善で10年前からとりあげられている。
    - みんなが1つのゴールを達成すること。
    - 子供たちが自分の持ち味を出せる場面設定をすることで実現できる。
  - ・ 競争学習・・・集団の中の序列がゴール。誰が1番かを決めること。
  - ・ 一人ひとりが自分の中で授業理論を確立することが大切。
  - ・ 授業者の数だけ、協同学習の理論がある。
  - ・ 終業前に、教科書をたたんでしまうのは、授業を先生（他人）の仕事だと思っていることからくる行為である。
  - ・ グループの話し合いの具体的な手順を示すこと。
  - ・ 教師が懇切丁寧に教えてあげることが必ずしもいいとは限らない。先生に尋ねる前に、「自分でやってみる」、「友達に聞いてみる」ことを促すと、本人の学びにつながる。
  - ・ 子ども自身が学びたいと思う枠組を提供する。
  - ・ 1時間ずつやりきりの学びではなく、見通しをもった長時間かかる学びを提供する。
  - ・ 仲良し関係と仕事をする関係はちがう。仲良し関係では、学び合いの関係は築くことはできない。
  - ・ 自分の意見を先生に向かってではなく、みんなに向かって発表する。
  - ・ 学習集団として、一体感が持てる机の配置にすること。
  - ・ 課題を明確にする・・・指示を明確にする。
    - 良い指示の例 「グループでだれがあてられても説明できるように話し合いをしなさい」
    - 「グループで答えを1つ出しなさい」
    - 悪い指示の例 「グループで考えなさい」
  - ・ 協同学習によって、仲間が支えてくれるので、学力に自信がない生徒が伸びる。自信がある生徒はメモを熱心にとるなど伝え方を工夫するので、仲間が自分の学習を支えてくれることが実感でき、伸びていく。
  - ・ グループ学習が協同学習ではない。
  - ・ 「協同」は方法ではなく、考え方である。テクニックではない。

## 協同学習ワークショップ

1 目的 協同学習という学習形態を体験的に理解し、その基本的な技能を習得する。

2 期日 平成23年7月21日

3 場所 邑久高校第1会議室

4 講師 創価大学 教育学部 関田 一彦 教授

5 日程 10:30 開会  
10:50 導入（ウォーミングアップ）  
・グループづくり  
・協同学習の基本的な考え方の説明  
12:00 休憩  
13:00 具体的な指導の展開  
・グループでの話し合い  
・おさえておきたい留意点  
15:00 振り返り  
質疑応答  
16:00 終了



## 6 内容

「従来のグループ活動との違いは？」「協同学習の効用」「グループ活動の成果点検」などについて、協同学習の形態で講義をしていただいた。今まで本を読んだり講演で聴いたりして、わかった気になっていた事項についても、人に説明することによって、あやふやだった点がはっきり見えてきた。いろいろな手法を自分が受講者として体験してみることで、協同学習とはいかに頭を使いそして疲れるものかということが実感できた。「よし、2学期からこうやろう」多くの教員がこう思った貴重な一日だった。

### （講義の一部抜粋）

#### 協同学習とグループ活動との違い

- ・協力して達成すべき目標（課題）が明確である  
→学習と態度に関するグループの目標と個人の課題
- ・目標達成のために、何をすべきか明確である  
→課題に対する責任とグループにおける役割
- ・必要な社会的技能を随時訓練している  
→リーダーを固定しない、態度目標の到達度点検等
- ・自他の貢献を評価し、賞賛しあう機会がある  
→振り返りによる学習への自律性と自己有用感の向上

## 校内研修会

講 師 岡山大学 教師教育開発センター 高旗 浩志 准教授

平成22年度

○第1回

1 期 日 平成23年1月27日

2 内 容

「学習集団形成度調査 報告書」により、ご講演いただいた。

「学習集団形成度調査」とは以下のようなものである。

調査実施時期：平成22年10月

調査対象：岡山県立邑久高等学校の生徒437名（男子192名、女子245名）

今回の報告書の内容及び構成

- ① 5段階評定による回答の平均値を算出し、学年別・学級別の比較を行った。
- ② 学習集団形成度に係る3要素（課題解決型学習集団形成度、支持的風土形成度・学習意欲形成度）について主成分分析を行い、その主成分得点を用いた検討を行った。

「学習集団形成度調査」により、生徒の「学び合い」の授業形態に対する意識が確認できた。

平成23年度

○第1回

1 期 日 平成23年9月20日

2 内 容

7限 校内公開授業

放課後 教員研修

- ・ 7限の授業についての講評等
- ・ 各教科から出ている「今後の課題」に関するアドバイス等

教員研修会では「学習する集団づくりの理論と技法」という演題でご講演いただいた。一斉指導形式の問題点、学習する集団づくりについてのご講演であった。また、各教科から出された「学び合い」の形態についての疑問点・悩みにもお答えいただいた。





○第2回

1 期 日 平成23年11月8日

2 内 容

7限 校内公開授業

1年3組	理科総合A	田淵
2年4組	保健	鈴木
3年2・3組	ソルフェージュ	吉田



放課後 教員研修

- ・7限の授業についての講評等
- ・第2回公開授業研究会に向けて今からでもできること等

「集団思考」・「個人思考」の使い方について、助言をいただいた。

「この時間は何をする時間なのか」を生徒に意識させることの大切さを確認した。

○第3回

1 期 日 平成24年1月23日

2 内 容

放課後 研修1 授業ビデオ視聴

「大津市立中央小学校 神田豊先生の実践」

小学校6年生 算数（11月頃）

問題：1リットルで $2/3$ ㎡ぬれるペンキがあります。このペンキ $3/4$ リットルで何㎡ぬれますか？

この問題を前時に宿題として提示し、各自で考えて、授業に臨んでいる。児童は自分で考え、積極的に発表しようとしていた。

研修2 視聴したビデオについての協議

「学習集団形成度調査（第2次）」の結果分析



平成22年10月実施の「学習集団形成度調査」と比較しての分析だった。昨年からの変化やクラス・学年の特徴が分かり、今後の指導の参考になった。

## 高等学校教科指導パワーアップ事業「数学」に係る研修会

講師 岡山大学大学院 教育学研究科 曾布川 拓也 教授

指導助言 岡山県教育庁指導課 赤松 一樹 総括副参事

### 平成22年度

#### ○校内授業研究会

1 期 日 平成22年5月31日

#### 2 内 容

7限 数学A（西岡・忠政）、数学B（杉山）、実践数学β（荒金） 研究授業  
放課後 研究協議

研究授業に関して、「学び合い」と高校数学の目標とのすり合わせをしていく必要がある旨の指導をいただきました。

#### ○第2回公開授業研究会

1 期 日 平成22年10月7日

#### 2 内 容

5限 数学I（守安・西岡・忠政） 公開授業  
6限 数学II（荒金） 公開研究授業  
7限 研究協議



### 平成23年度

#### ○第1回公開授業研究会

1 期 日 平成23年6月9日

#### 2 内 容

5限 数学II（西岡・守安）、数学III（武藤） 公開授業  
6限 数学I（荒金） 公開研究授業  
7限 研究協議

閉会后 数学科 公開授業・公開研究授業 反省会・指導助言

閉会后の反省会での指導助言で数学的な内容をしっかり教えていくべきことや、授業の構成や展開の方法をさらに研究していくべきである旨の指導をいただいた。

○第1回校内授業研究会

1 期 日 平成23年9月17日

2 内 容

6限、7限 数学Ⅱ（守安・西岡・忠政）、数学A（下村） 研究授業  
放課後 研究協議

研究協議では、曾布川先生から『指数の拡張』の別の指導方法」や、『独立な試行の確率』を考えさせることと協同学習の関係』について指導をいただいた。

○第2回校内授業研究会

1 期 日 平成23年10月10日

2 内 容

6限、7限 数学Ⅱ（守安・西岡・忠政）、数学A（下村） 研究授業  
放課後 研究協議

研究協議では、曾布川先生より「対数の導入の指導例」を示していただき、「教科書の単位によっては『学び合い』をしない方がいい時もあるので、しっかりとした授業研究が必要である」とご指導いただいた。『鈍角の三角比』の導入がしっくりいかない」という悩みに対する答えの一つとして、実際に鈍角の三角比の導入の模擬授業をしていただいた。

○第2回公開授業研究会

1 期 日 平成23年11月17日

2 内 容

5限 数学Ⅱ（西岡・守安・忠政） 公開授業  
6限 数学A（下村） 公開研究授業  
7限 研究協議

研究協議では、この1年半の取組で授業がかなり協同的になってきたことや、「学び合い」の授業も導入当初から比べるとずいぶん生徒に浸透してきたこと、数学の指導そのものも研究が進んできており、今後に期待するという講評をいただいた。

## 先進校の視察・学会参加

### 広島県立安西高等学校 訪問

- 1 期 日 平成23年7月2日
- 2 訪問者 出射 恵
- 3 内 容

同校は「協同的な学び」に平成18年度から取り組んでいる。当日は本年度の第1回公開授業研究会が行われていた。

午前に4時間ある授業の3・4時間目の授業をすべて公開しており、まずそれを見学した。ひとつの授業をじっくりと見ることも出来たのだが、多様な実践にふれるせつかくの機会なので、すべての授業を巡回しながら見させていただいた。この授業公開には、北は埼玉から南は沖縄まで計134名もの教育関係の方々が視察に来ておられた。

授業見学で印象に残ったことは、まず授業開始時を大事にしているということである。おざなりに開始の礼をすることなく、どの授業でも全員がきちんとした服装や態度になるよう注意・指示し、それを確認したうえで始めていた。授業導入時を特に大切にするのは「協同的な学び」の特徴のひとつであるようだが、ここにその後の授業展開中の机の移動、話しあい、グループごとの発表などを円滑に運ぶ秘訣があるように思われた。

多くの授業で、午後の中心授業と同様にクラスの机をコの字型に配置していた。必然的に中心に位置する教師に視線が集中すると同時に、教師の側からも一人ひとりの生徒の状態を把握しやすい。また生徒同士がお互いの学習状況を視線に入れながら学習するためよい緊張感が教室に生まれているように思われた。

午後の中心授業では、2年の「数学ⅡB」の授業が展開された。授業展開中に机間に入るのも、授業後に話し合うのも安西高校の先生だけで、見学の先生は終始それを取りまいて見るという形態であった。本校での中心授業の展開とは異なっていて、新鮮に感じた。また日常的にどのように授業公開や相互の講評が行われているのかがわかりやすかった。

スーパーバイザーの佐藤学先生（東京大学教育学部大学院教授）のアドバイスは「生徒が安心して学習できる環境づくりには成功している一方で、やや停滞感も出てきている」・「より高い次元での学びの実現のため、今後は授業レベルのさらなる向上や生徒同士の関係の強化への配慮が必要」、「課題に取り組む方策としては校内の授業研究会を質量ともにより充実させる」というものであった。本校でも参考にしていきたいと思う。

## 神戸大学附属中等学校住吉校舎 訪問

### 平成22年度

- 1 期 日 平成23年2月5日
- 2 訪問者 杉山 義則
- 3 内 容 グローバルキャリア人を育成する授業の創造  
～協同学習で活きる中等教育学校のカリキュラム編成  
授業参観（2年数学・2年社会・研究協議・講演会）

### 平成23年度

- 1 期 日 平成23年5月16日
- 2 訪問者 下村 雅和・渡邊 真哉・寺岡 俊之
- 3 内 容 学校概要説明 協同学習の概要・留意事項説明  
教員研修（新任者・それ以外）、生徒の協同学習訓練  
授業参観（3限：3年国語 4限：2年数学 3年数学） 質疑・協議  
協同教育訓練の実施状況を知る

神戸大学附属中等学校住吉校舎について

1学年3クラスの中教育学校（現在中1・2年）小中9年間の一貫校として昭和40年代から協同学習（小集団学習）に取り組んでいたが、附属学校の再編により中教育学校として生まれ変わり、現在高等学校のカリキュラム編成を模索している段階という。

## 日本協同教育学会参加

### 平成22年度

○日本協同教育学会 第7回大会（山口県立大学）

- 1 期 日 平成22年9月4日～5日
- 2 参加者 杉山 義則・下村 雅和
- 3 内 容 ワークショップや実践報告、ラウンドテーブルに参加し、情報交換を行った。

### 平成23年度

○日本協同教育学会 第8回大会（千葉大学・植草学園大学附属高校）

- 1 期 日 平成23年10月1日～2日
- 2 参加者 荒金 徹・姫路 真由美
- 3 内 容 ラウンドテーブルに話題提供者として参加した。

協同学習の理念と実践に基づく学校改善・授業改善の取組—高等学校の事例に学ぶ

企画者：高旗浩志（岡山大学）杉江修治（中京大学）

話題提供：村山大輔（倉敷市立玉島高校）、荒金徹・姫路真由美（邑久高校）

- 1 学習に向き合う主体が変わるしかけ
  - 2 教師間の協同
  - 3 評価方法
- グループごとに1～3のテーマについて話し合った。

## 中学校での出前授業

### 伊里中学校での実践

1 日 時 平成23年12月7日 10:55～12:45

2 授業者 地歴公民科 三宅 章夫

3 対 象 備前市立伊里中学校3年生(2クラス)

#### 4 内 容

##### 授業目標

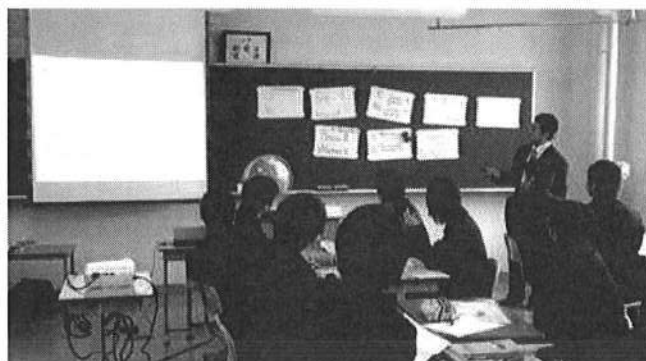
- (1) オーストラリアの風土や文化を、写真を通じて、読み取る。
- (2) 地図と地球儀を通じて、日本から見たオーストラリアの関係(位置、時差)を考える。
- (3) オーストラリアの都市の気候(雨温図、ケッペンの気候区分)を理解する。

##### 授業デザイン

- (1) 4人グループを作り、役割(司会・発表係、運搬係、ミニホワイトボード係、偵察係)を決定する。
- (2) 運搬係が、オーストラリアの特徴を表す写真入りの封筒を1つグループに持ち帰り、1枚の写真をもとに本時のテーマの国名を考える。  
写真例 グレートバリアリーフ、アボリジニ、街並みの写真(イギリス風)、街並みの写真(シドニー)、国旗、コアラ、カンガルー
- (3) ミニホワイトボード係が、グループの写真を貼り付け、各グループに写真が見えるように教室を周回する。他の生徒は、写真をみて国名を考える。
- (4) 写真の解説
- (5) 地図と地球儀を見て、オーストラリアの位置を読み取り、日本との時差を考える。また、飛行時間と時差をもとに、日本を出発しオーストラリアに到着した際の時刻を計算する。
- (6) 地図(赤道の位置確認)と空中写真(降水量の識別を着色で確認)をもとにオーストラリアの気候を考える。南半球に位置することに気づかせ、季節について考えさせる。
- (7) 雨温図をもとに、ケッペンの気候区分(CsとAwの小文字sとwが表す意味)をグループで推測させる。
- (8) 発表、まとめをする。

#### 5 生徒感想

- ・グループ学習では、みんなの意見を参考にいろいろ考えたり、普段の授業より自分の意見を出せたので授業に参加したという気持ちが大きかったです。(女子生徒)
- ・邑久高校の授業の進め方や学び合いとはどのような学習方法なのかを少し理解できて良かった。(男子生徒)
- ・学び合いでは、人前で意見を発表したりするのが苦手な私にとっては、とても勉強しやすい環境だと思いました。オーストラリアについて詳しく知らなかったなので、初めて知ることたくさんあり、オーストラリアの知識を身につけることができました。(女子生徒)



## 生徒の声・教員の声

### 3年1組 亀川 文伽

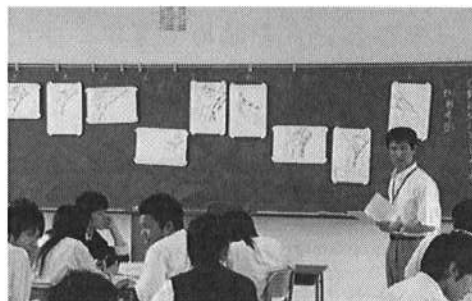
私たちは3年間、コミュニケーション力の向上や課題への理解を深める目的で学び合いを導入した授業をしてきました。

学び合いの授業では今までの板書を写すことや一人で考えるだけの静かで少し息苦しさをを感じる授業とは異なり、話し合いをすることで自分になかった発想や考え方を知ることができ、より授業への理解が深まるだけでなく、楽しく学習出来ます。また新たな人間関係を築くことや積極性、協調性を持って人と関わっていくことに対してずいぶんと経験を積むことが出来ました。

一方で、極端に人見知りな生徒やコミュニケーションが苦手な人など、思うように学習に打ち込めない人もいるでしょう。そうした班では充実した発表は出来ません。そんな時には、周りの生徒が手助けをすることが大切です。学び合いの授業を成立させる事への取組が生徒の自主性を育て、今後の学び合いへの発展にも繋がっていると、私は期待しています。

### 2年4組 本郷 寧々

私は、「学び合い」の授業が邑久高校にあって良かったと思っています。なぜなら、いろいろな人の意見を聞くことができ、自分の考えとグループ内の人の考えとを比較する事ができるからです。数学の授業の時などでは、問題を解く時にグループ内で話し合いながら解くことで、問題の解き方を説明する力、解き方を聞き理解する力を身につける事が出来ました。化学の授業では、たくさん問題を解く時に、一人ひとりの役割を決める事で、一人で問題を解くよりも早くでき、時間を有効に使える所が「学び合い」のいい所だと思います。また、クラスの中で、日頃あまり話さない人とも「学び合い」の時にコミュニケーションをとることができ、いろんな人と仲良くすることができる所も「学び合い」のとても良い所だと思います。



### 1年4組 久重 有紀

私が、学び合い学習を初めて知ったのは、去年の夏でした。去年の夏、オープンスクールで邑久高校の先生が、学び合いについて説明しておられるのを初めて聞いて、「すごいな、やってみたいな。」と思ったことを今でも覚えています。岡山県の県立高校で初めて導入したということを知って、すごいと思いました。そして、邑久高校に入学し、憧れていた学び合いを初めてしてみて、「とても分かりやすい！」とすぐに思いました。まず、生徒同士で教え合うことにより、今まであまり話をしたことのない人とも話が出来ました。それからわからない問題を教えてもらうことで、分かるようになるし、教えることでより理解が深まります。つまり悪いことがないのです。生徒同士の仲も問題の理解度も深まるし、私は邑久高校に来て学び合い学習が体験出来てよかったと思っています。最高の勉強スタイルだと思います。

## 国語科 寺岡 俊之

『しゃべりすぎない』教師を目指していこう。」

私が、邑久高校での「学び合い（協同学習）」で目標にしたことだ。確かに「学び合い」を成功させるのは、生徒を惹きつけるテクニックや実践方法にもよる。今まで「学び合い」を導入した授業を県内外問わず、可能な限り参観させてもらった。

「生徒への指示は一回だけ。一回しか言われなから生徒も聞き逃すまいと耳を傾ける緊張感がある。」——— 同じく「学び合い」を盛り込んだ授業に試行錯誤している教員からのコメント。指示は簡潔に。教員が説明する時間を削ることで、生徒の学び合いの時間を増やすことが大事だ。本校アドバイザーの杉江中京大教授からも言われたことがある。しゃべり好きな教員として、これは「修行」だ。

口にチャックしながらも、自分も実践してみる…。「指示は一回。アドバイスも言わないから、自分達で調べて、考えて、話し合っ、答えを出していこう。」…生徒の目の色が変わった。

やはり、教材研究とワークシートづくりは必須だ。日々仕事に追われながらも、プロとして決しておろそかにしてはならない。その苦勞が、生徒の学力向上につながると思えば…。これからも、「しゃべりすぎない」教師に近づいていきたい。

## 地歴・公民科 小松原 基弘

「学び合い」を始めて2年、ひたすら教材を探してネットと書店巡りの毎日という感あり。ワークシート作成に職員室の机周りは切りくずだらけ。これは受けるだろうと気負った教材は肩透かしを喰らい、アイデアなく時間切れで「まあやってみるか」としぶしぶ出した設問が大受けだったり。思わぬ意見・解答に「じゃあ…」とアドリブで追加の質問、こんな仕掛けづくりが学び合いの醍醐味かと。「自分が面白くない教材を生徒に示すのは生徒に失礼だ」の言葉を胸に今日も切り貼り。転任当時嘆息ばかりだったベテランの先生が、「こんな教材手に入れたよお」「これやらせたら面白いんじゃないかなあ」なんて生き活きと話題提供して下さる。職員室もいい雰囲気じゃないか。どうせやるなら「楽しまずんば是如何」かなと。

## 数学科 忠政 計志

私は邑久高校2年目の講師（数学）です。つまり、邑久高校で「学び合い」が本格導入された初年度に赴任したわけです。赴任当初は、「生徒への発問」や「生徒の気づき」について、どのように対応していけばよいか、正直わからず戸惑いばかりの日々でした。しかし、校内で開かれる教員同士の「学び合い」の授業を参観したり、教員研修を受けたりすることで、そこからさまざまなヒントを得ることができました。私の場合、いかに生徒全員に考えさせるかということを中心に重視し、課題を決めています。様々な学力の生徒がいるので、簡単な課題から少し頭を使う課題まで幅広く用意します。男女が交じった3~4人の班で、役割（①司会、②記録、③発表、④出張）を決めます。課題に取り組み、発表し、みんなで知識を共有する。授業の最後には、振り返りシートを使って、「今日の気づき」を書かせ、生徒にフィードバックします。実は、この気づきを書き残しておくことが大事だと考えています。なぜならば、この「今日の気づき」を見直すことで、「今まで以上にテスト勉強がはかどった」という生徒の声が聞けたからです。また、「学び合い」について2年間自分なりに試行錯誤したおかげで、授業の手法も以前に比べて幅が広がったと実感しました。これからも積極的に「学び合い」についての授業見学や研修会に顔を出していきたいと考えています。



## アンケート考察

### 生徒アンケート結果（4月、11月実施）

#### 1 数学意識アンケート(1年次生対象)

##### (1) 数学に対する意識変化

質問1 高校の数学は好きか

質問2 高校の数学は得意か

	4月(%)	11月(%)		4月(%)	11月(%)
好き	4.1	8.1	得意	1.4	4.1
やや好き	23.1	25.7	やや得意	11.6	16.2
どちらでもない	38.1	27.0	どちらでもない	31.3	24.3
やや嫌い	18.4	11.5	やや苦手	23.1	18.2
嫌い	16.3	27.7	苦手	32.7	37.2

##### [考察]

質問1で、「好き・やや好き」が、27.2%(4月) → 33.8%(11月)、質問2で、「得意・やや得意」が、13.0%(4月) → 20.3%(11月)と、ともに上昇している。一斉授業で、ある意味取り残された生徒にとって、「学び合い」により授業に参加できる環境となったため、数学に対して好意的な印象として受け止められている傾向にあると考えられる。

##### (2) 「学び合い」を取り入れた授業に対する意識変化

質問3「学び合い」で数学の学力がついたか

質問4「学び合い」は効果があると感じるか

	4月(%)	11月(%)		4月(%)	11月(%)
向上した	8.2	11.5	感じる	39.5	20.9
やや向上した	40.8	35.1	やや感じる	42.2	37.2
変わらない	51.0	47.3	どちらでもない	8.8	30.4
やや低下した	0.0	4.1	あまり感じない	7.5	8.1
低下した	0.0	2.0	感じない	2.0	3.4

質問5「学び合い」で他の人に分かりやすく説明できるようになったか

	4月(%)	11月(%)
なった	2.0	9.5
ややなった	32.0	23.6
どちらでもない	38.1	39.9
あまりなっていない	19.7	9.5
なっていない	8.2	17.6

##### [考察]

質問3では、「向上した」が、8.2%(4月) → 11.5%(11月)と、「学び合い」による自身の学力向上を感じている割合はわずかながらも増加している。「基礎力はついたか」9.5%(4月) → 13.5%(11月)、「応用力はついたか」6.8%(4月) → 8.1%(11月)、「学び合いで数学に自信はついたか」6.1%(4月) → 10.8%(11月)と、類した質問項目でも同様の結果が出た。しかし、全般的には「変わらない」と感じている割合に変化がなく、自身の学力アップを実感できていない。今後、実感をもたせる工夫と取組が必要である。

質問4では、「効果がある」と実感しているのは、81.7%(4月) → 58.1%(11月)と減少しているが、「どちらでもない」が、8.8%(4月) → 30.4%(11月)と増加しているのは、新鮮味が薄れ、その効果にそれほど効果を実感できていないものと考えられる。一方で、質問5「学び合いで他の人に分かりやす

く説明できるようになったか」という質問に対して、「なった」という回答が2.0%(4月) → 9.5%(11月)に上昇しており、少しずつではあるが、その成果も表れてきていると感じる。しかし、質問4の結果から、約10%は効果があることに実感できておらず、授業改善や教材研究の充実を図るなど、教員のさらなるスキルアップが求められていると考える。

## 2 学習アンケート(1年次生対象)

質問1 一人より協力した方が良い結果が得られる

	4月(%)	11月(%)	[協同志向]
とてもそう思う	58.5	44.8	
ややそう思う	36.1	44.1	
あまりそう思わない	4.1	7.6	
全くそう思わない	1.4	3.4	

質問3 みんなで意見を出し合うことはためになる

	4月(%)	11月(%)	[協同志向]
とてもそう思う	66.0	46.2	
ややそう思う	29.9	42.8	
あまりそう思わない	3.4	9.7	
全くそう思わない	0.7	1.4	

質問5 グループだと友達の意見が聞け自分の知識が増える

	4月(%)	11月(%)	[協同志向]
とてもそう思う	59.2	44.1	
ややそう思う	31.3	46.2	
あまりそう思わない	8.2	6.9	
全くそう思わない	1.4	2.2	

質問7 自分が知りたいこと以外のことを勉強するのは嫌だ

	4月(%)	11月(%)	[課題志向]
とてもそう思う	14.3	20.7	
ややそう思う	30.6	40.7	[逆転]
あまりそう思わない	40.8	26.2	
全くそう思わない	14.3	12.4	

質問9 問題が分からない友達に解き方を教えるのは面倒だ

	4月(%)	11月(%)	[協同志向]
とてもそう思う	2.7	4.1	
ややそう思う	6.1	19.3	[逆転]
あまりそう思わない	46.9	42.1	
全くそう思わない	44.2	34.5	

質問2 グループで活動するより一人の方がやりがいがある

	4月(%)	11月(%)	[個人志向]
とてもそう思う	4.8	10.3	
ややそう思う	12.9	31.0	
あまりそう思わない	63.9	46.2	
全くそう思わない	18.4	12.4	

質問4 みんなで話し合っていると時間がかかる

	4月(%)	11月(%)	[個人志向]
とてもそう思う	6.8	22.1	
ややそう思う	38.8	40.0	
あまりそう思わない	37.4	25.5	
全くそう思わない	17.0	12.4	

質問6 友達に教えることは自分のためになる

	4月(%)	11月(%)	[協同志向]
とてもそう思う	49.7	51.0	
ややそう思う	38.8	35.9	
あまりそう思わない	10.2	10.3	
全くそう思わない	1.4	2.8	

質問8 成績とは関係ない問題も面白い問題なら解きたい

	4月(%)	11月(%)	[課題志向]
とてもそう思う	19.0	17.9	
ややそう思う	49.7	40.0	
あまりそう思わない	19.7	23.4	
全くそう思わない	11.6	18.6	

質問10 できない問題を皆で助け合ってできるようにしたい

	4月(%)	11月(%)	[協同志向]
とてもそう思う	60.5	45.5	
ややそう思う	32.0	40.0	
あまりそう思わない	6.1	8.3	
全くそう思わない	1.4	6.2	

### [考察]

全体的には、4月と11月を比較して「協同志向」の面で数値的に下降している。これは生徒の「学び合い」に対する見方や協同的な力が増大していることや、継続的に実施してきたことで授業のマンネリ化が出てきていることが原因と考えられる。しかし、個々の項目をみると、肯定的な意見の割合はとても高い数値として出てきており、生徒は学習活動において「ひとりで」より「仲間と」を望んでいることが分かる。また、グループで協同的な活動をするを9割近くの生徒が「ためになる」と思っており、「学び合い」を継続して実施していくことが生徒の良い方向への学習へつながり、生徒のニーズに合ったやり方であると考えられる。友人に教えることは面倒とは考えていない生徒が8割近くいることは、一人でわかることよりも皆で分かっていくほうが、より充実感を味わえることを表しているのではないかと考える。

## 教員対象アンケート結果

学び合い(協同学習)に関するアンケート

質問1 授業に「学び合い」をどのくらいの頻度で取り入れていますか。

質問1	回答数
1時間に1回	4
3～4時間に1回	9
1単元に1回	7
ほとんど取り入っていない	1
その他( )	9

質問2 グループの決め方は？

質問2	回答数
自由	0
くじ引き	1
教師が決める	23
その他( )	6

質問3 「学び合い」を全校導入してよかったと思いますか。

質問3	回答数
よかった	22
よくなかった	1
どちらともいえない	7

質問4 「学び合い」を取り入れて生徒の学びが変わったと思いますか。

質問4	回答数
変わった	19
変わらない	2
どちらともいえない	8

質問5 「学び合い」によって生徒にどのような力がついた(つく)と思いますか。

質問5	回答数
考える力	17
聞く力	11
伝える力	19
書く力	0
学力( )	4
その他( )	5

質問6 どのような形式・内容の研修会があるといいですか。

質問6	回答数
授業研究会	19
講演会	4
ワークショップ	11
研修会は必要ない	4
その他( )	3

質問7 「学び合い」を効果的に行うためには何が必要だと思いますか。

[ 記 述 ]

質問8 「学び合い」を行う上での問題点・悩み等があれば書いてください。

[ 記 述 ]

### [ 考察 ]

「学び合い」を本格導入して2年目を迎え、全員の教員が授業で実施している。ただし、科目の特性などにより、実施する頻度はそれぞれである。

グループの決め方は、生徒の実情を考慮しながら、教員側で決めている場合がほとんどである。男女2名ずつ4人組を基本にしているが、男女比の偏りや、人数、「多様な生徒集団になること」などを考えてグループの構成をしている。「学び合い」を全校導入したことに対しては、「教員同士が学び合え、情報交換しやすい」、「他教科の授業見学の機会が増え、ヒントを得ることができた」、「コミュニケーション能力は育ったと感じる」など、肯定的な意見が多かった。一方で、「授業進度が気になる」、「学力が伸びていない」など、その効果が実感できていないのも事実で、今後このような問題点を共有して解決していくことが必要であると思われる。

「学び合い」で生徒の学びの姿に変化があったかという質問では、「変わった」と「どちらとも言えない」に分かれた。「分からないことを聞くことは恥ずかしくないという雰囲気になった」、「授業に対する取組姿

勢が前向きになった」など、生徒の学習姿勢の変化を感じている教員がいる反面、実践してみたが生徒の変化が感じられない教員も半数近くいる。「生徒にどのような力がついたか」については、「考える力・聞く力・伝える力」という回答がほとんどである。この他、「責任力、協調性、積極性」という意見もあった。全般的に、生徒にとってプラスになっていると感じている割合が多い。今後の研修のあり方については、「他校の実践を見学したい」、「定期的な校内の授業公開」、「小さなグループで濃密な意見交換ができる場」という意見が多く、「事前の教材研究の充実」や「相互の意見交換ができる場をつくり、教員全員で学校の雰囲気をつくること」など、前向きな意見が多くみられた。

質問7 「学び合い」を効果的に行うためには何が必要だと思いますか。

[主な回答]

- ・適切なグループ分け
- ・良い教材の研究、手軽に(学び合いが)できる環境
- ・教員の方が見る研修ではなく、体感する研修を
- ・教員の工夫
- ・生徒側に考える練習、協同学習を行うための素地
- ・事前の教材研究(本時+単元+年間)
- ・授業構成と準備
- ・何を必要とする授業か(発話力・理解力・知識・・・)
- ・教員間での学び合い
- ・目標や目的意識の明確化
- ・課題の提示の仕方、基礎学力の充実
- ・効果ある研修の時間確保のため、不要な会議研修のカット
- ・全体(教職員)でやっというと思える雰囲気作り
- ・時間(教材研究などにかかる時間)
- ・日常的な生徒の人間関係が必要
- ・実践校の視察
- ・評価に取り入れること。取り入れ方の研究が必要
- ・生徒同士が良好な人間関係を築こうとする雰囲気
- ・授業で取り上げる課題
- ・教員の指示が分かりやすくて確であること
- ・上手くいかないことを相談したり、上手くいったことを共有する場をつくり、教師全体で学校の雰囲気をつくること
- ・教師側の心の余裕、楽しみながら次の実践を考えていけるような時間の余裕

質問8 「学び合い」を行う上での問題点・悩み等があれば書いてください。

[主な回答]

- ・学力が高い子は一人で頑張りたいという気持ちが強い、真面目に取り組めない子が相手だと協力できない場合がある
- ・「学び合い」が「写し合い」になっていることもある
- ・他校の実践を見学に行きたいが、多忙でなかなかいけない
- ・(学び合いが)できる教科とできない教科があるのではないか
- ・だんだん慣れてマンネリ化してくるそれを打破するにはどうすればよいか
- ・一つの課題に対して皆で考えるため、一人で行う家庭学習にどう繋がればよいか
- ・授業時間の不足(授業進度に影響)
- ・中学校側の理解と連携
- ・教員の理解と協力
- ・上位者の学力の伸び悩み
- ・「学び合い」を実践している教員と、していない教員との温度差。すべての授業に取り入れる方がよいか、悪いか、分からない
- ・試行錯誤の連続
- ・無理なく取り入れることができるような共通理解がほしい
- ・問題設定の難しさ

## 「学び合い（協同学習）」導入のための環境整備

### はじめに

「学び合い」の授業を成立させるのに必要な要件の一つとして、学習環境の整備が挙げられる。環境整備は決して「学び合い」の本質ではないが、教室での学習環境の充実も「学び合い」を支える重要なファクターの一つといえる。本校での取り組みは安価で簡単に導入できるものからはじめた。以下、他校を参考にそろえてみたアイテムを紹介する。

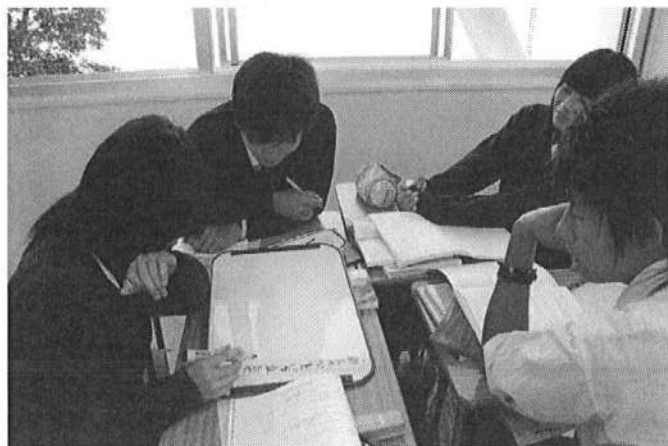
### テニスボールの装着

「学び合い」の授業では、一授業時間内でグループ活動と一斉講義を繰り返すため、頻繁に机・イスの移動が行われる。素早くスムーズに騒音を立てることなく移動を行うため、硬式テニスのボールを机・椅子の脚に装着した。既に小学校などで広く普及しているが、授業中の騒音も減り、生徒の集中力維持にも効果が期待される。テニスボールは机・イス合わせて一人分に8個が必要である。テニスボールの入手は、テニス部顧問の協力も仰いだが、大部分はインターネットを通じて入手した。本校が利用したサイトは、NPO法人が立ち上げたもので、テニスボールのリユース活動について、全国のテニス関係者から集めた使い古しのボールを希望する学校機関に無料で配布し、その送料の一部を募金の形で受け取るという方法をとっている。脚への装着方法であるが、切れ目を入れるのに、カッターナイフで切ったり、電動ドリルで穴をあけたりと色々試してみた。その結果、ボールにサインペンで7 cm × 5 cm 程の+印をつけ、カッターナイフで切れ目を入れる方法が簡易であるとわかった。



### ホワイトボードの活用

「学び合い」では、グループでの集団思考の結果を必ず講座全体で共有させる。それに有効なのがミニホワイトボードの活用である。ホワイトボードにグループの意見など記入し、一斉に黒板に掲示させると、即座にお互いの発表を見ることができる。また、グループ内で記入する係、発表する係のように役割分担が容易にでき、さらに、小さなホワイトボードは、グループの生徒



が全員で見て、すぐに消したり書いたりできるので、グループ全員が活動に参加しやすいという利点がある。本校で使用しているのは特注品で、サイズはA3版、両面記入可能で、周囲に強化のための枠が付き、裏表ともマグネットが両短辺に付く。黒板に貼り付けても隙間ができ、チョークの字がこすれないようにしてある。このホワイトボード10枚を単位として手提げ袋に入れ、加えて黒・赤・青のマーカー各10本と小型のイレイサー10個をセットにして普通教室に備え付けている。

## 平成 24 年度以降の計画

邑久高校が「学び合い（協同学習）」に取り組み始めて2年が経過した。「『学び合い』とは何か」から始まり、手探り状態で授業を行いながら、一斉授業では見られなかった生徒の反応や学習への取組を見て、「学び合い」を実践して「このような問いかけにはこんな反応がある」「このようなワークシートの作りでは自分の思った方向へ授業が行かない」「こんな活動指示を出すと思いがけずとてもうまくいった」など、良かった部分や改善した方がいい部分を少しずつ個々の先生が積み上げてきた。しかし、その積み上げてきた「学び合い」に関する財産をみんなの物として共有できる体制にはまだまだ至っていないのが現状である。個々の教員が持っているノウハウを多くの教員に発信し、それを他の教員が実践できるようにするための研修会を持てるよう来年度以降計画をしていきたい。

また、「学び合い」の簡単な説明と、授業中の各教科それぞれの説明だけで「学び合い」をいきなり始めた面があり、生徒達、特に1年次生は多少混乱した面も見られた。この点を改善するとともに、「学び合い（協同学習）」ではとても大切な「聞くこと」「話すこと」「グループの意見交換をスムーズに行うための各自の役割の果たし方」「司会の進め方」などをしっかり身につけるため、年度当初に「協同学習訓練（仮称）」を1年次生対象に実施する計画を進めている。

邑久高校の「学び合い（協同学習）」は、全校導入から2年である。まだまだ納得のいく状態ではない。今後も研究と実践を続けていき、その成果を多くの方に見ていただき、ご教授をいただかなければならないと考えている。そのため、来年度以降次のことを予定している。

- ・ 専門家に授業実践を見ていただき、指導・講評をいただくことのできる研修会を設け、授業力をアップする。
- ・ 6月・11月に公開授業研究会を実施し、教員の実践研究とするとともに、邑久高校の「学び合い」の進歩を見ていただく機会とする。
- ・ 協同学習などの研修会に積極的に参加し、授業力の向上を図っていく。
- ・ 協同学習を実践している他の高校や中学校を積極的に訪問し、授業方法や集団づくりの方法を学ぶ。
- ・ ICT 機器を効果的に取り入れる方法を研究していく。
- ・ アンケートや学習集団形成度調査・学力診断テストなどを利用して「学び合い」の意識の変化や成果をうまく数値化できる分析法を研究する。
- ・ 協同学習を実践している岡山県内の他の高校と連携し情報を共有できる仕組みを検討していく。



## 資 料

- 1 岡山県パワーアップフォーラム発表資料
- 2 『VIEW21』2010年度進路環境研究 掲載記事
- 3 『VIEW21』2010年度12月号 掲載記事
- 4 生徒・教員アンケート用紙・結果
- 5 学習集団形成度調査結果（岡山大学教師教育開発センター 高旗 浩志 准教授）
- 6 授業ワークシート・授業スライド等

これらの資料は、すべて邑久高校ホームページからPDFファイルでご覧いただけます。

邑久高校ホームページ <http://www.oku.okayama-c.ed.jp/oku.htm>

## 取組のまとめ

教頭 河合 哲

### 「学び合い」の導入

- (1) 平成21年5月に学力向上プロジェクトチームを結成し、チームとして取り組む内容を次のように決定した。
  - ①先進校の見学や研修会等の情報を通して、学力向上の方法を考える。
  - ②学力向上のための方策を検討し、提案・実践する。
  - ③授業公開・研修会を実施し、授業力の向上を図る。
- (2) 先進校の視察や本校での「学び合い」の試行を踏まえ、プロジェクトチームで検討した結果、本校の生徒の学力向上に「学び合い」が有効であろうとの見通しを得たため、職員会議で校長より、平成22年度から全校で学び合いを授業に取り入れる方針が示された。
- (3) 平成22年度学校経営計画の当該年度目標の1番目に、「『学び合い』を授業の中に取り入れ、仲間とともに高め合うことで、学力の向上とコミュニケーション能力の育成を図る」ことを掲げた。また、自己目標シートの「教科等の指導」の欄に、学び合いの取組を入れるよう全教員に指示した。
- (4) 平成22年から2年間、県教育庁指導課主管の「高等学校教科指導パワーアップ事業」の指定を受け、「『学び合い』～自ら考え、共に高め合う授業づくり～」のテーマで、2年間研究・実践を行うことにした。学び合いの実践は、全校・全教科で行うことにしているが、パワーアップ事業については数学科で指定を受け、公開授業研究会などを行った。
- (5) この取組へのアドバイザーとして、次の3人の方に特に指導・助言をいただいた。

中京大学 国際教養学部 杉江 修治 教授  
(全国協同学習研究会会長、日本協同教育学会理事)

岡山大学大学院 教育学研究科 曾布川 拓也 教授  
岡山大学 教師教育開発センター 高旗 浩志 准教授

### 取組の特色

本校での「学び合い」の取組のポイントは、以下の4点である。

#### (1) 生徒に「学び合い」の意味を説明する

学び合いの授業では、成績上位層の生徒から、「なぜ分からない生徒に教えなければならないのか」「もっと先生から説明してほしい」という声が挙がるため、学び合いを導入する際に生徒に対して、学び合いの意味や目的を説明した。「教えることで自分の理解が深まる」「相手と話すことで違う考えに触れることができる」「社会に出ればチームで仕事をする。その時に必ず教えたり教わったりするのだから、その土台となる力もつく」「成績の良い生徒にも力がつくと信じてやっている」といった内容を伝え、多くの生徒は納得して、授業に取り組むようになった。



(2) 教員は授業で説明しすぎない

教員が説明を最小限にすることで、生徒は自分で調べたり友達に質問したりする習慣が身につく。学び合いの授業の感想を生徒に聞くと、「頭を使う」「疲れる」とかえってくる。これは生徒にとって授業が、ただノートを写す時間から自分の頭で考える時間になったことを示している。

(3) 授業で学んだことを振り返らせる

学び合いの授業では、できるだけ授業の最後にその時間に学んだことをもう1回自分の言葉で言わせるようにしている。授業の振り返りをさせることで、何が分かって何が分かっていなかったかを頭の中で整理し、定着させることを目的としている。また、自分の変化に仲間がどのように貢献したかを振り返らせることも大切である。

(4) 授業スタイルを固定しない

全校で「学び合い」を導入したが、授業の全てをグループ学習で行わなければならないわけではない。新しい概念を説明する時など、一斉授業の形式が効果的な時は、グループの形はとらない。4人が机を合わせる形だけが「学び合い」ではない。「集団の仲間全員が高まることをメンバー全員の目標とする」ことを基礎に置いた実践が「学び合い（協同学習）」である。教科・科目の特色、学習内容や時期を考慮しながら、最適の形式で行えばよいと考えている。

## 取組の成果と課題

### <成果>

学び合いに対する生徒の評価は概ね高い。私語や居眠りをする生徒が減少し、積極的に授業に関わろうとする生徒が増えてきた。「自分ができるようになることが嬉しい」という意識から、「皆ができるようになることが嬉しい」と意識が徐々に変化していき、授業以外でも自習教室などで学び合い（教え合い）をしながら勉強する生徒の姿が見られるようになった。教員も生徒の顔を見る時間が増えたことで、その場で生徒の理解度を把握でき、授業の改善や修正が容易になった。また、職員室でも授業の話が増えるようになった。

### <課題>

多くの教員はまだ試行錯誤をしながら、よりよい学び合いの授業を模索している段階である。教材開発時間の確保、授業進度の確保、グループの作り方、参加しない生徒の扱い、グループへの的確な指示の出し方など、学び合いを進めていく上で解決しなければならない課題は多い。また、コミュニケーション力やプレゼンテーション力の向上など、学び合いの導入による学力以外の成果をどう測るかも今後の課題である。

## 編集後記

邑久高校が「学び合い（協同学習）」を学校全体で導入して2年。このように取組の成果のまとめを出せるまでになったことを大変嬉しく思っています。これも、中京大学杉江先生、岡山大学曾布川先生、岡山大学高旗先生はじめ多くの専門家の方々、岡山県教育庁指導課、全国の協同学習を実践し邑久高校の取組を支援くださった皆様のお陰と感謝しています。

授業での実践を通して、今までの講義式の一斉授業では見られなかった生徒の反応や学習へ向かう姿勢を見て、これまでの授業で感じていた学習への課題の解決の糸口が少し見えてきたり、「学び」とは何かを考えるようになったことは、私たちにとって大変大きな成果であったと感じています。

また、この「学び合い（協同学習）」の考え方や授業のあり方は、新学習指導要領の目指すところへの一つのモデルでもあることは間違いなく、来年度からの新課程の授業へ向け、協同学習の考え方を中心にすえて実践していくことができると思っています。

邑久高校の取組は、まだまだ未熟ではありますが、少しずつ「学び合い（協同学習）」が根付いてきていると実感しています。生徒達とともに我々教職員も成長できていることに喜びを感じ、今後も実践を積み重ねて財産としていきたいと思っています。そして、邑久高校が岡山県の、そして全国の高校教育における協同学習の先進校となることを夢見ています。

平成24年 春

岡山県立邑久高等学校学力向上委員会 下村 雅和



**平成22・23年度  
「学び合い（協同学習）」2年間の取組**

平成24年3月26日 印刷

平成24年3月29日 発行

編集・発行 岡山県立邑久高等学校  
〒700-4221  
岡山県瀬戸内市邑久町尾張404  
Tel(0869)22-0017 Fax(0869)24-0329  
<http://www.oku.okayama-c.ed.jp/oku.htm>

印刷 フジイ印刷株式会社





